島原市文化財調査報告書　第１集

大手浜遺跡調査報告

（島原市大手浜の砂丘遺跡）

１９８１年３月

島原市教育委員会

大手浜遺跡調査報告

（島原市大手浜の砂丘遺跡）

1981年3月

島原市教育委員会

発刊にあたって

昨今における急速な開発は，地域の近代化をもたらすとともに，他方，史跡，名勝，天然記念物及び自然景観の破壊を促進し，更に先人か残した貴重な生活様式か埋もれていると思われる埋蔵文化財を消滅させるなと，これら文化財の保存対策はきわめて急務のことてあります。

本市におきましても文化財の現状を把握し，その保護顕彰をはかるとともに，地域住民の文化財に対する理解と関心を深めるよう努めているところてこさいます。

本調査は，本市の大手浜総合利用計画をすすめるにあたって，大手浜遺跡，防波堤遺構，遠見番所跡の輪郭を明らかにし，その規模を知るとともに，存在の意義を確認しようとするため，調査報告書としてまとめたものてあります。島原大変により石垣，遺構，遺物等か押し流され，原形回復には至っておりませんか，その働きを考えあわせた時，調査の意義は大きなものかあります。

この報告書か郷土の歴史を正しく理解し，さらに文化財保護の一助として役立つよう願うものてあります。

最後になりましたか本調査を担当していたたいた島原市文化財保護審議委員古田正隆，吉田安弘両氏並びに関係者各位に深く敬意を表します。

昭和56年3月

島原市教育長　平井　皎

本　文　目　次

1　大手浜遺跡の概要　5

A．遺跡地の地形変化（第２図，1，2）　6

B．遺物よりみた遺跡の文化年代（図版第５～16図）　7

2　遺　　構

A．防 波 堤（図版第１図）　9

B．金戸山(金蔵山)周辺の石垣（図版第２，３図）　9

C．金戸山(金蔵山)「図版第４図」　10

D．石干見(すくい)「第１図８地点及び写真図参照」　10

3　各トレンチの状況（第１，４図，図版第26図）　12

１トレンチ　（第１図，第４図－１，２）　12

２トレンチ　（第１図，第４図－２，３）　12

３トレンチ　（第１図，第４図－３）　12

４トレンチ　（第１図，第４図－４）　12

５トレンチ　（第１図，第４図－４）　12

６トレンチ　（第１図，第４図－５）　12

4　遺　物（図版第５図～第16図，27図）　18

5　遠見番所と島原教会について（吉田安弘）　20

6　猿　石（島原の浦所在資料の一つとして）「第８，第９図」　25

7　ま　と　め　27

挿　図　目　次

第１図　各トレンチ設定図　3

註　１　旧猛島神社所在地　２　イン瀬（竜宮島）　３　旧建造物の所在を示す盛り土跡（第２図にある新大波戸）　４　別図防波堤（百間波止）所在地　５　旧石組「石垣」を残すところ（橋跡か）　６　元「ナル川」と呼はれたといわれる。５同様石垣跡を残す。７　金戸山（金蔵山）遠見番所跡　８　石干見（すくい）　９　大手川旧川口，原図は島原市事業推進室作製提供

第２図　１図　大手浜の地権図　１　現在の堤防　島原市事業推進室提供　5

２図　寛政地変前後の島原の地図（長崎県土木部河川砂防課「眉山」Ｓ48－６より　原図は島原市中村氏所蔵）　6

第３図　大手浜埋立予定図（島原市事業推進室提供）　8

第４図　各トレンチ図

1　１トレンチ１～10　13

2　１トレンチ11，12　２トレンチ１～８　14

3　２トレンチ９～13　３トレンチ１～５　14

4　４トレンチ１～５　５トレンチ１～５　15

5　６トレンチ　16

（古田，小畑，村田ハルエ「補助」作制）

第５図　大手浜遺跡全景（上下続き）　17

第６図　発掘調査現場と背後の島原市街（東より西に向って）　18

第７図　金戸山（金蔵山）の全景（南西より）　19

第８図　島原猿石写真　26

第９図　島原猿石実測図　26

図　版　目　次

第１図　大手浜防波堤実測図（残存部）断面，斜度図附　31

第２図　金戸山南側残存石材実測図（Ａ～Ｂ断面図）　33

第３図　金戸山西側残存石材実測図（Ｃ～Ｄ断面図）　35

第４図－１　金戸山実測図（古田実測）　37

－２　金戸山各部地区の平断面図（古田実測）　39

－３　島原市の地形変化図（島原市事業推進室作製）　41

第５図　昭和31，32年採集土器実測図（Ａ１，Ａ２，Ａ３，Ａ５，古田保Ａ４　鍬取清氏保「Ｓ25－11出土」）古田実測　42

第６図　昭和31，32年採集土器実測図　43
（Ａ25，Ａ26，Ａ27，Ａ28古田採集　猛島神社保　Ａ27　製塩土器）小畑弘己実測製図，中尾ヨシエ補助

第７図　昭和31，32年採集遺物実測図　44
（Ａ29，Ａ30，Ａ31，Ａ32，Ａ33古田採集，猛島神社保　Ａ32　鍔破片Ａ33　青銅釧　Ａ31　組織痕土器）小畑弘己実測製図　中尾ヨシエ補助

第８図　昭和31，32年採集土器実測図　45
（Ａ11，Ａ12，Ａ13，Ａ10，Ａ17，Ａ18，Ａ24，Ａ８，Ａ９，Ａ15，Ａ16，Ａ14，Ａ23，Ａ19，Ａ21，Ａ20，Ａ22の各土器）古田実測

第９図　大手浜遺跡遺物実測図　46
（41，67，54，32，44，45，34，42，36，436，421，219，173，273　133，279の各遺物）古田実測

第10図　大手浜遺跡遺物実測図　47
（324，344，189，93，98，460，458，457，208，201，209，207，527，44，416，415，204，100の各遺物）古田実測

第11図　大手浜遺跡遺物実測図　48
（62，63，46，20，40，76，47，48，72，25の各遺物）古田実測

第12図　大手浜遺跡遺物実測図　49
（６，Ａ７，８，９，73，31，74，27，16，75，64，69，３，１の各遺物　Ａ７　Ｓ31採集）古田実測

第13図　大手浜遺跡遺物実測図　50
（563，476，554，423，459，428，555，268，184，278，372　419，304，311の各遺物）古田実測

第14図　大手浜遺跡遺物実測図　51
（99，69，242，248，510，537，472，246，346，323，533，420

181，367，476，550の各遺物）古田実測
第15図　大手浜遺跡石器実測図　52
（A番号はS31，32年採集，A1，A2，A3，A4，A5，A6，A7
9，2，24，528，427，505，161，59，527の各遺物）古田実測
第16図　大手浜遺跡遺物実測図　53
（329，186，58，97，496，92，210，366，320の各遺物）古田実測
第17図　大手浜海岸の干潮時（上）と満潮時近い頃の（下）同一干潟地　55
註　上は石干見（すくい）であるが現況は標高0米て，一帯は干潮時は干潟となる。
第18図　遺跡地の風致地区指定の立札（上），2トレンチより見た金戸山（中），
第1図8に示す石干見（すくい）（下）　56
第19図　金戸島（上，片町新田より），大潮時トレンチに潮が入る（1～3トレンチ）
大潮時潮を受ける大手浜遺跡（下）　56
第20図　旧防波堤（西より東に向って写す）　57
第21図　旧防波堤の状況（いすれも西から東に向って写す）　57
第22図　旧防波堤の状況（上左は防波堤南側，上右は北側，「上図はいずれも
東に向って」下は北側「東より西に向って」）　58
第23図　旧防波堤（上は北側の捨石の状況，中は北側の基礎積の状況，下は基礎の
積石て除去された状況）　59
第24図　金戸山の景（上　金戸山南側石垣の状況，中　金戸山西側石垣崩壊の状況
下　金戸山南西隅より対岸に橋かあったといわれる，その礎石
とみられる状況）　59
第25図　金戸山の石組（上　金戸山東側の二重石垣，中　金戸山北側の登坂の状況
下　金戸山西南隅にみる積み土の状況）　60
第26図　トレンチ断面写真図　61
1　上　1t－1（e）　下　1t－5（e）
2　上　1t－9，中　1t－7（上錘，磁器の出土状況）　下　1t－8
3　上左　2t－10（5層上部瓦の出上）　上右　2t－8（4層磁器，
陶器6層瓦，陶器の出土状況）　下左　2t－4（陶器出上状況）
下右　2t－7（3層下骨片と陶器の出土状況）
4　上　2t－13　中　3t－2　下　3t－5
5　上　4t－1　中　4t－3　下　4t－4
6　上　5t－2　中　5t－4　下　6t
第27図　遺物写真図　64
1　上　遺物集　中　上段左より329，186，505，中段左より427，59，527

下段左より113，58，528，161，下　上段左より196，198，199，
186，中段左より200，242，197，250，251，下段左より264，231，
252，253，254，259，230
2　上段左よりA２，A５，A１，二段左よりA３，A７，A12，A11，
三段左よりA20，A23，A10，246，248，下段左より181，323(裏と表)
3　上段左よりA28，A25，A27，A31(裏)，二段左よりA26，A30，
A31(表)，下図　上段左より113，208，54，100　二段左より209，201
41，178，下　207
4　上段左より97，92，496，436，173，二段左より113，214，273，
279，三段左より241，424，422，423，下段左より425，No15，184
5　上段左より210，267，181，207(組織痕土器)　476，二段左より
491，492，481，480，三段左より482，483，493，494，下段左より
483，422，423，424，425
6　上　上段左より490，487，488，下　489，中　上段左より51，19，
62，下段左より 74，75，76，下　上段左より63，26，下段左より
40，46
7　上　上段左より98，458，209，527，中段左より457，208，416，201
下段左より415，204，44，460，中　上段左より278，554，184，563
372，中段左より423，304，476，459，下段左より311，268，428，
419，555，下　上段左より512，513，中段左より266，247，249，267
255，下段左より256，257
8　上段左より64，99，533，420，69，510，346，二段左より248，３，
537，243，473，三段左より507，501，502，508，四段左より506，
475，478，508，505，五段左より465，470，464，467，463
六段左より469，460，472，466，457，下段左より468，473，Noなし，
474，471，461
9　上　２ｔ－４(上層上面)出土舟釘と磁器，中　上段陶器，下段骨片と
木炭(３ｔ－１，３層出土)　下　左２ｔ－６(４層)出土鉄片，
中　２ｔ－７(３層下)出土骨片，右　２ｔ－９(３層)出土舟釘
10　縄文土器表裏写真図（左より73，278，27)
第28図　金戸山関係写真図　上　金戸山台上の地伏石の状況　中　金戸山の登坂路
下　登坂路下の路跡　72
第29図　(1)岱竜園神社　(2)鷹島の岬 (3)浜ノ城の遺構の一部 (4)八天山 (5)川竹山の八大
竜王碑　(6)植木元太郎氏旧邸から　(7)島原の浦　(8)竜神石碑　(9)弁天山　73
(10)烏山一帯　(11)－イ，(11)－ロ　蛇信仰

報告使用遺物(昭和31，32年度採集)区分表

遺物番号	品目別	大手浜採集物の摘要	備考	
A－1	土師器		(古)	7図
A－2	弥生土器		〃	〃
A－3	〃		〃	〃
A－4	土師器	昭和25　11　鋤取清発掘 大手浜岩崎鼻同氏保		
A－5	弥生土器		(古)	7図
A－6	土器		〃	〃
A－7	土師器		〃	12図
A－8	〃		〃	8図
A－9	〃		〃	〃
A－10	土器		〃	〃
A－11	弥生土器		〃	〃
A－12	土器		〃	〃
A－13	〃		〃	〃
A－14	〃		〃	〃
A－15	〃		〃	〃
A－16	〃		〃	〃
A－17	〃		〃	〃
A－18	土師器		〃	〃
A－19	土器		〃	〃
A－20	土師器		〃	〃
A－21	〃		〃	〃
A－22	土器		〃	〃
A－23	土師器		〃	〃
A－24	〃		〃	〃
A－25	〃		(猛)	6図
A－26	弥生土器		〃	〃
A－27	土師器	製塩土器かも知れぬ	〃	〃
A－28	〃		〃	〃
A－29	〃		〃	7図
A－30	須恵器		〃	〃
A－31	土師器	組織痕土器	〃	〃
A－32	鍔		〃	〃
A－33	青銅釘		〃	〃

註　(古)は古田保，(猛)は猛島神社保。

報告使用遺物(昭和31，32年度採集)区分表

遺物番号	品目別	大手浜採集物の摘要	備考
A － 1	石器	玄武岩	(古) 15図
A － 2	〃	〃	〃 〃
A － 3	〃	〃	〃 〃
A － 4	〃	〃	〃 〃
A － 5	〃	〃	〃 〃
A － 6	〃	黒曜石	〃 〃
A － 7	〃	玄武岩	〃 〃

報告使用遺物区分表

遺物番号	品目別	出土地（トレンチ別）	備考
3	土錘	採集	
19	土器	〃	
26	陶器	〃（古瀬戸かも知れない）	オロン皿
40	〃	〃	
41	土器	〃	
44	土師器	〃	
46	陶器	〃	
51	土器	〃	
54	〃	〃	
58	石器	〃	玄武岩
59	〃	〃	〃
62	土師器	〃	
63	陶器	〃	
64	土師器	〃	祭祀土器
73	縄文土器	〃	鐘ヶ崎式
74	弥生土器	〃	
75	〃	〃	
76	陶器	〃	
92	鉄釘	〃	
97	鉄片	〃	
98	土師器	〃	
99	〃	〃	祭祀土器
100	陶器	〃	
113	石器	〃	玄武岩
133	土師器	〃	
161	石器	〃	玄武岩
173	弥生土器	〃	底部
181	須恵器	〃	
184	縄文土器	〃	阿高式か
186	石器	〃	玄武岩
192	土器	〃	
196	〃	〃	底部
197	〃	〃	縄文
199	陶器	1T－11　2層上部	
198	〃	1T－11　1層中	
200	須恵系土器	1T－11　〃	

報告使用遺物区分表

遺物番号	品目別	出土地（トレンチ別）	備考
201	土器	採集	弥生
204	土師器	〃	
207	〃	〃	組織痕
208	土器	〃	弥生
209	〃	〃	〃
210	石器	〃	紡錘車
211	土器	〃	
214	陶器	〃	
230	磁器	1T－8　1層	
241	弥生土器	採集	
242	土錘	〃	
242-2	土器	〃	
244	陶器	〃	
246	土師系か	1T－10　4層上面	土鈴の玉か（鎌倉期の陶丸とするには小さすぎる）
247	磁器	3T－1　3層	
248	土錘	1T－7　3層下部	
249	陶器	3T－1　3層	
250	磁器	1T－7　1層	
251	〃	〃　〃	
252	〃	〃	
253	〃	〃	
254	陶器	〃	
255	土器	3T－1　3層	
256	磁器	〃	
257	土錘	3T－2　2層	
259	磁器	1T－5　1層	
264	〃	1T－11　1層	
266	〃	3T－2　5層	
267	土師器	〃	
268	土器	2T－2　6層	縄文，スカリ式
273	弥生	採集	丹彩
277	陶器	〃	
278	土器	〃	縄文
304	〃	〃	〃
311	〃	〃	
323	瓦器	〃	

報告使用遺物区分表

遺物番号	品目別	出土地（トレンチ別）	備考
329	石器	採集	玄武岩
346	土師器	〃	底部
372	土器	2T－10　3層	縄文
376	瓦	2T－10　5層	
415	土師器	採集	口縁部
416	〃	〃	底部
419	土器	〃	黒川式
420	土師器	〃	口縁部
422	土器	〃	縄文か
423	〃	〃	〃
424	〃	〃	
425	〃	〃	
428	石器	〃	黒曜石
457	土師器	〃	
459	〃	〃	
460	土器	〃	弥生
472	土錘	〃	
475	土器	〃	
476	土師器	〃	
478	〃	〃	
480	陶器	5T－3	
481	スレート	〃	
482	土器	〃	
483	磁器	〃	
491	瓦	5T－5　4層	
492	陶器	〃	スリ鉢
493	磁器	〃	
501	〃	5T－1　3層下	
502	陶器	〃	
505	石器	採集	玄武岩
506	陶器	〃	
507	磁器	4T－5　3層	
508	陶器	4T－4　5層	
513	磁器	5T－1　3層	
514	陶器	〃	
515	土師器	5T－2　3層	

報告使用遺物区分表

遺物番号	品目別	出土地（トレンチ別）	備考
516	磁器	5T－2　3層	
517	〃	〃	
518	陶器	〃	
519	〃	〃	
520	土師器	〃	
521	土器	〃	弥生
522	磁器	1T－1　1層	
523	上器	〃	縄文，曾畑か
524	陶器	〃	
525	土師器	〃	
526	鉄滓	採集	
527	石器	〃	黒曜石
528	土器	〃	黒川式
535	〃	〃	
536	〃	〃	弥生底部
550	土師器	〃	製塩土器
557	陶器	6T　砂利層	
558	〃	〃	
559	土器	〃	縄文
560	陶器	〃	
562	カラス破片	〃	
563	磁器	〃	（他に同一番号て阿高式あり）
564	〃	〃	
566	〃	〃	
567	〃	〃	
568	〃	〃	
569	〃	〃	
570	〃	〃	
571	〃	〃	
572	土器	〃	
573	磁器	〃	
574	〃	〃	

以下遺物番号か重複するものあり，図，写真図を参照して判断されたし。

報告使用遺物区分表

遺物番号	品目別	出土地（トレンチ別）	備考
487	土器	6T 砂利層	
488	〃	〃	
489	〃	〃	
490	〃	〃	
496	〃	〃	
501	瓦	〃	
502	〃	〃	
505	陶器	〃	
506	〃	〃	
507	〃	〃	火鉢
508	瓦	〃	
509	〃	〃	
510	陶器	採集	製塩土器足
512	〃	3T－1	
513	土器	〃	
524	磁器	2T－13	
527	土器	採集	
528	〃	〃	
533	瓦器	〃	
534	土器	〃	
537	土錘	〃	
550	土器	〃	製塩土器足
554	〃	〃	黒川式
555	〃	〃	〃
563	〃	〃	阿高式か

調査期間中の採集遺物

土器片 380，石器 9，土錘 4，鉄片 3，須恵器 2，瓦器片 2

出土品（土として弥生と土師器）58，土錘 1，石器 1，磁器 47，陶器 57，瓦 12，須恵器 1，鉄片 1，鉄滓 1，カラス 1，（いすれも破片）

金戸山より鉄滓若干，木蠟若干，合子破片 1

はじめに

大手浜遺跡は，長浜遺跡あるいは金戸山（金蔵山）遺跡等と従来呼はれてきた。

地形的には同一地てあるか，旧島状からすれは区々の名称も，土地の人々の区々な呼称と共に頷けるものがある。（第２図－２）

大手浜周辺一帯は，昭和12年４月22日島原海岸風致地区に指定され，以前は猛島海水浴場もこれに含まれ，老松と青い海，白い汀に加えて，清水の湧く生活地として，併せて島原市民の羨望されるに充分な，代表的風致海岸てあった。

今は，市民によって保護されるはずの，自然の文化も色褪せてき，不要物の堆積場てあり，市民生活の，生活残糟の漂着場の感かある。

水の都と称されてきた島原市民も，無尽てない水の価値を徐々に認識し，ここに下水道処理場の建設か計画され，（広報「しまはら」317号，S.55－12）後て述へるような，この地特有の，不可解な難問の処理に市当局か着手しはしめた。

その事前調査として，下記の如き調査団を昨昭和55年10月に編成，遺構測量，発掘調査を10月11日より，12月15日まてと，明けて昭和56年２月17日より同25日までの間に実施した。

記

島原市下水道処理場建設に伴う大手浜遺跡調査団編成表

調査団顧問　平井　皎　（島原市教育長）
〃　清水孝一　（島原市事業推進室長）
調査団団長　中山春男　（社会教育課長）
団員　櫨本光祥　（教育委員会）
〃　・計画進行担当
副島義一　（教育委員会）
〃　・庶務管理担当
古賀雅敏　（事業推進室）
〃　入江輝臣　（〃）
〃　橋本信彦　（〃）
〃　小畑弘巳　（熊本大学学生・考古学専攻）
・発掘担当
古田正隆　（日本考古学協会会員）
・金戸山の歴史的位置づけ担当
吉田安弘　（島原市文化財審議会委員）

以　上

調査期間中特に労務を担当された

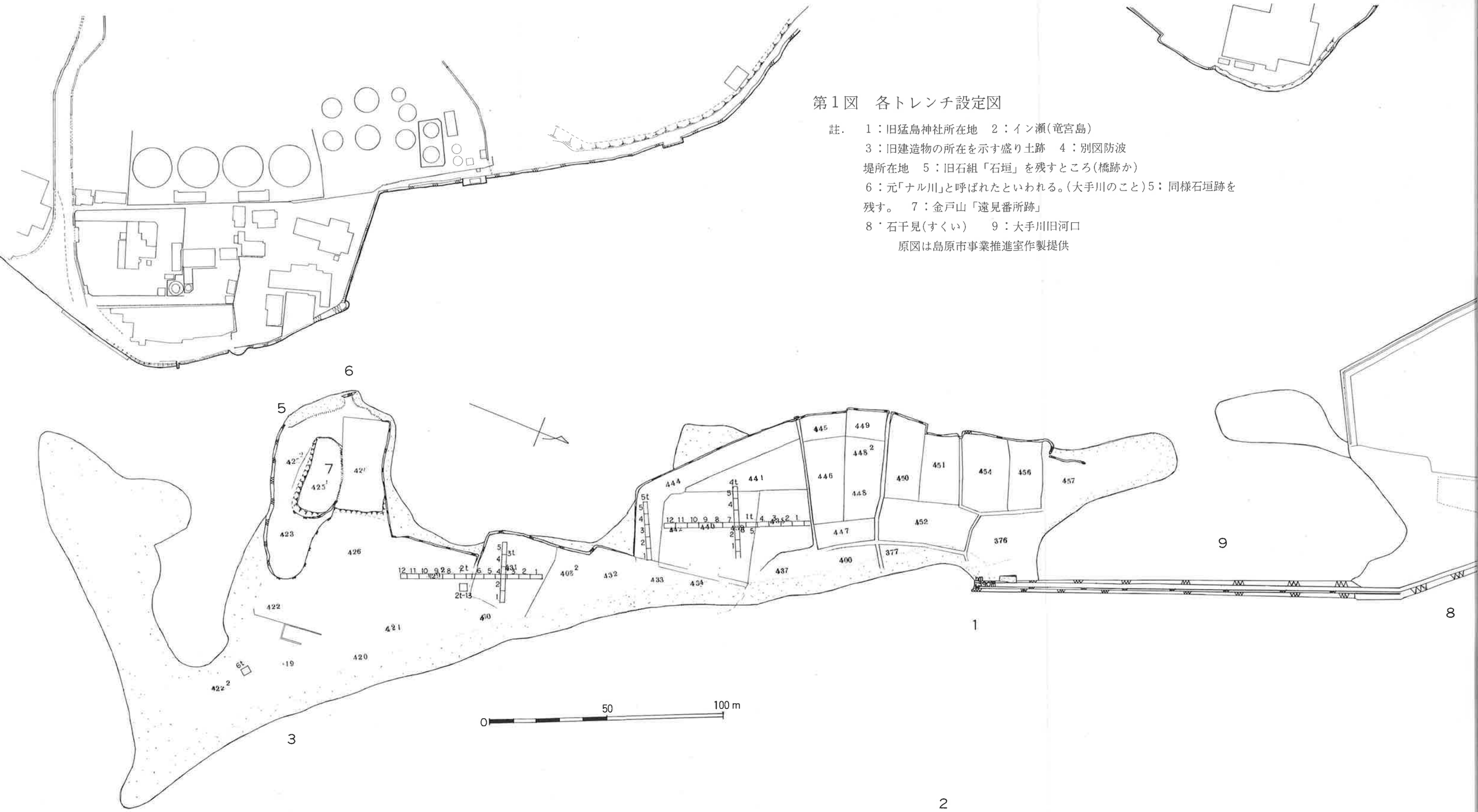
中尾ヨンエ，馬場マツコ，吉岡タカコ，吉岡ヨネコ，村田ハルエ，馬場カスエ

の各氏には，寒風の厳辺て連日の労をわすらわし，ここに改めて感謝の意を表したい。

教育委員長 山本為五郎，猛島神社宮司 寺田 猛の各位には多くの支援を賜わり，特に長崎県水産試験場島原分場の各位には，連日に亘る物品の保管をはしめ，厚情を賜わった。また島原振興局関係各位にも合わせて，ここに銘記し，感謝と敬意を表したい。

昭和56年3月

古 田 正 隆



第１図　各トレンチ設定図

註.　１：旧猛島神社所在地　２：イン瀬(竜宮島)
３：旧建造物の所在を示す盛り土跡　４：別図防波堤所在地　５：旧石組「石垣」を残すところ(橋跡か)
６：元「ナル川」と呼ばれたといわれる。(大手川のこと)5：同様石垣跡を残す。　７：金戸山「遠見番所跡」
８：石干見(すくい)　９：大手川旧河口
原図は島原市事業推進室作製提供

1. 大手浜遺跡の概要

大手浜海岸の風致に富んだ旧状は，「はしめに」て述へたか，戦後間もない頃，爆発的に流行したのか釣フームてあった。

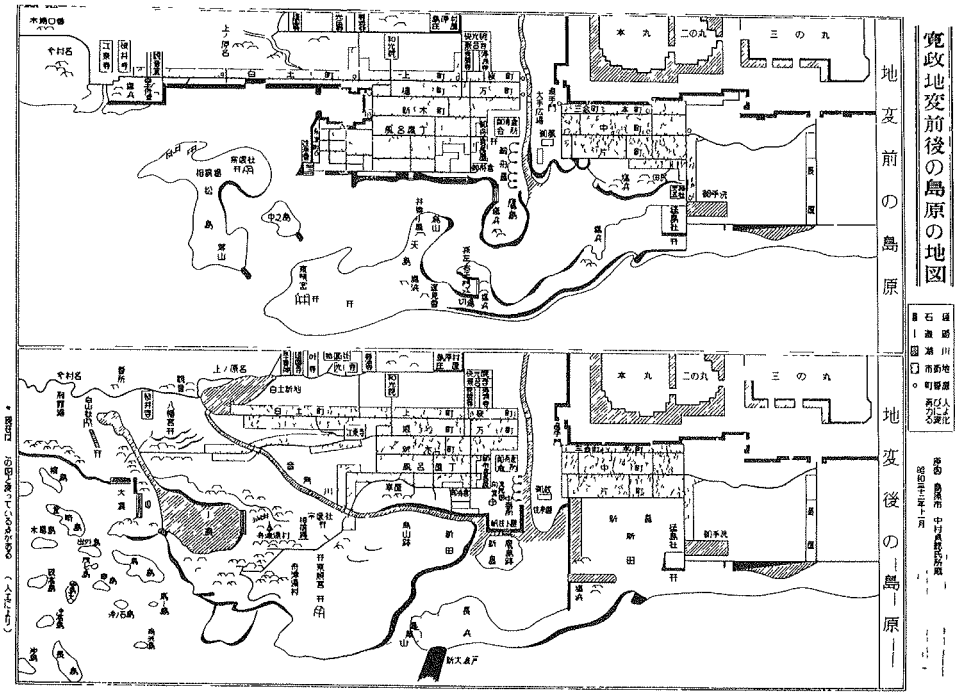
当時島原市石戸町(1918番地)に住む鍬取清氏もその一人て，特に海の磯釣りを楽しんた同氏は昭和25年11月14日の夜，大手浜岩崎鼻（現在の防波堤南端より東約30米位の地点「第2図1の 300番地附近」）て夜釣り時，大波に洗われた背後の砂中に，何やら容器らしいものか首を出していることを認め，これを掘り出してみたら，土製の壺てあった。（図版第5図A4）

壺は丁度首を上に，砂中に据え置いたように埋めおかれていたものか，大潮（当時は大潮「大潮は旧暦1日，15日の前後3～4日」）のため砂か洗い持ち去られて出土したものらしい。（報者も当時現地に案内され実見。）

以来大手浜は，弥生文化終末から，古墳文化初頭頃の遺跡という報か伝えられたした。その後昭和31年の台風に際し，津浪状の波浪のため，大手浜一帯の海岸は洗われ，石の土砂は流失，大きく海の進人かあった際，特に宮の丁356番地の，飯島印太郎氏所有地[1]を中心に，附近より多くの遺物を出土[2]，遺跡地としての確認かなされるにいたった[3]。（現在の防波堤の大部分は，この災害復旧工事として築堤された。）

したかって遺跡は点てなく，橘行一氏の報もあり[4]，現猛島神社海岸から，土師器の附着したヒーチロノクも出土発見されたか，これは必すしも気温との関係を論することには，疑問のあるところとしても，南有馬町海中にはサンコの一種か群棲し[5]，以上の地区的，地理的状況からみた場合，圃場整備のための干拓の，フルトーサーによる整地や，現三好屋新田地区の，未調査のままの宅地開発についても，文化財保護法からみて，行政指導上疑問の残るところてある。

第2図－1　　大手浜の地権図（1は現在の堤防）—— 現在の水際線



第２図－２

A．遺跡地の地形変化（第２図－１，２，図版第４図－３）

先に，約50年以前頃のこの地の地形をみると，第２図－１の地権図の如く，現存の約３倍の広さをもつ，島状地形であったことが知れ，今その３分の２は，海水面下に没するものの，大潮時の干潮時は干潟化し[l6]，現在でもそこには地権（所有権）が存在しているありさまである。

以上述べたような現象は何が原因したのであろうか，かつて報者が，島原市の防災資料[l7]として島原市海岸地帯の地殻の不安定さを，指摘したことがあった。年間約１㎜の沈降が続き，その上局部地の地殻活動が加わり，近くては近世三好屋新田の埋めたてが行なわれ，天保８年より数年間それらに基因した潮流と，波浪の流動変化がおこり，時には陸化し，時には海化し遺物が示す年代の，人々の生活地は一体どこに比定できるのかさえ定かでない。（土師初頭文化は旧岩崎鼻地域）

とはいえ干潟には，竜宮島，「イン瀬」等の名もあり，現防波堤南端東側海中には，猛島神社の旧所在が伝えられ[l8]，現猛島神社海岸から，三好屋新田を含めた大手浜海岸は，（旧陸地の干潟地を含め）遺物各年代の人々の生活に，大きな役割を果たしてきたことは疑えない事実であるが，地形の変化の甚だしさが，もろもろの複雑性の基をなしていることも，また事実である。

遺物からみた場合，上の原水源地遺跡[l9]から，白土湖水北側[l10]は，（山崎屋酒造店西裏の，現市道上）弥生中，後期遺跡であり，恐らく当時の海岸線であったことが考えられ，沖積地の発達は，上の原上部[l11]，本光寺附近[l12]に古墳の成立をみるに至ったことは，よくこの間の事情を裏付け，以上のことを考えれば，大手浜遺跡は，大部分海中に消えた旧島状地形上に形成されたかも知れない

という，（大手浜より仲田綴附近につらなる地）示唆か得られよう。

供積層の状況からすれは，三会海岸より仲田海岸にかけてみられ，市街地は寺町の下部（善仏寺附近）にも一部に拡かっている。してみると，広く拡かる低供積扇上に，その後幾度かの火山爆発の降下物か被さり，結果的には，この地の旧地形は想像と判断の域を出ないのか現実て，近世のものは第２図の２による以外，知る方法はないといえよう。

Ｂ．遺物よりみた遺跡の文化年代（図版第５図～16図）

図中73，184，197，268，278，304，372，419，523，528，559，554，555，563 は，縄文土器片とみられるもので，遺物全体からすれは，２パーセント足らすの数てあるか，更に422，423も同様と思われる。

523は曾畑式らしくみうけられ，184，563は阿高式て，268は滋賀里式[L11]系の，瀬戸内黒土Bi[L12]の系統の，縄文晩期土器らしく，島原市礫石原ても出土例かある[L13]。この資料は，419，528，554，555の，黒川式土器と平行関係の遺物とみられよう。

523は，曾畑式土器とみられるか，器面のローリンクか甚たしく，確実にとはいえない。184，563は，中期阿高式土器て，近くは三会下町海中より多くの資料かみられ，73の鐘ケ崎式土器はこれらの文化に次くものてあろう。

以上の遺物からみて問題は，523土器てあるか，この土器の文化比定の確実性か高いものとすれは，縄文文化の前期から中期，後期，晩期，弥生文化後期，古墳文化前期，平安時代後半，その後とひとひに鎌倉，室町，戦国，江戸末，明治，大正，昭和の各期に及ひ，その間断続てはあるか，この地居住者の生活の，永い基盤てあったことにちかいない。

遺跡地の文化の断続性の特質は，述へたように，海岸接地線の，形成消滅という自然現象に，支配されたということも見のかせない事実てあろう。

註　解

1　現在は片町新田と町名か変更されている。事情は当時のことて，現在は海化，防波堤の外となり，市の所有地となっている。

2　図版中Ａ番は昭和31，32年採集のものてあるか，破片か大きく，ローリンク痕をみないため，遺跡地てあったことか確認てきた。

3　長崎県教育委員会「長崎県遺跡地名表」長崎県文化財調査報告書第１集，Ｓ　37－８，文部省「長崎県遺跡地図」Ｓ．41，報者も参加

4　橘行一「五島の beachrook について（その一）」長崎大学教養部記要，自然科学４巻別冊，Ｓ．40－３

5　古田「金比羅遺跡」南有馬町教育委員会刊，Ｓ．56－３

6　古田「島原市の海中干内(図録)」百人委員会埋蔵文化財報告２集，Ｓ．49－１，古図はいすれも現地形と類似して記載されているか，遺物の出土状況からみれは承認てきないもので，古記，古文書の

研究には充分注意の必要があろう。

7　古田「古代遺物からみた島原市の防災資料」S　46－7，この一部は前出6にも転載してある。

8　古田「高島神社考 ― 島原市に所在する ― 」島原新聞社，野島文化16，S．36－1

9　前出3

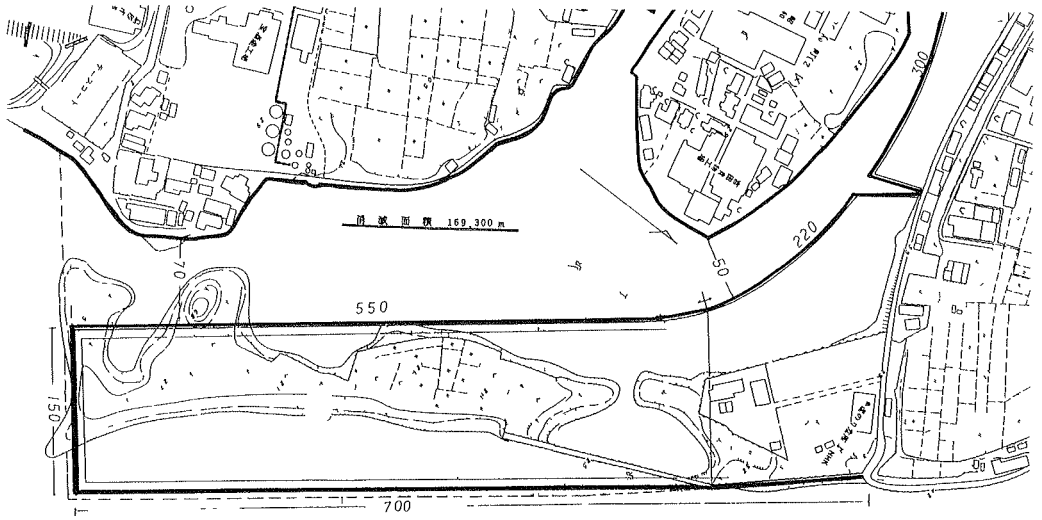
10　前出3

11　坪井清足「滋賀県大津滋賀里遺跡」考古学年報1，S．26

12　鎌木義昌，木村幹夫「中国」日本考古学講座3所収，S　31－2

13　日本考古学協会西九州特別調査委員会「島原半島の考古学的調査第二次概報(昭和36年度)」九州考古学14，1962　遺物は文化財指定

14　前出6



第3図　　坤立予定図

2. 遺　　構

A．防　波　堤　（図版第１図）

防波堤遺構は第１図４地点に，幅約７～８米，全長約50米余の，砂丘端より（実際は金戸山近くからの構造てあるか，露出石は，二次的用途のため除去された残存物てある）東の海中に突出した形てあり，石材は安山岩てあるか，大は３ｔ近くのものもあり，基礎は列石状に横に並へ，内外共に人頭大以上の多量の捨石て保護されている。（多分基礎下は，洪積層粘土状の，海水塩分によって，凝固化された上に乗っているものと考えられる。）「図版写真図第20図～第23図」

このような大かかりな石積技法は，築城石垣にみられるか，ここては基礎石以外は，方形に形成されたものはなく，大部分は自然石か，若干打割り法を加えられたもので，この石積の二次利用といえは，近くに築城された島原城の石垣以外になく，現地て整形されたと認めるに足る，割石片は全く残されていない。

若しこの事実か当を得たものとすれは，島原城[15]の築城以前の遺構とみなけれはならない。

「こきいてて，なおまたしはし島原に，もろこし船の誰れを待つらん」　これは鎌倉時代になった，新選六帖の中に，藤原光俊[16]の歌として残されている。

一にいう有馬島とは島原半島のことらしく[17]，合津地峡の海峡時代に発生した島名てあろう[18]ここにいう「しまはる」とは島原（しまはる）の浦て，島原の入口，即ち海路口，（うしくち）港のことてあり，現在の島原内港は，小湊と称された寛政地変後になったもので，（第２図－２）外港は昭和38年以後のものてある。これら地変による地形変化からみて，旧湾（みなと）の所在，即ち島原の浦と呼はれたところは，とっくに伝承は消えたか，　本遺構は百間波止場と呼はれ，第２図の，２の下にみられる新大波止は，　（第１図の３）フロイスの日本史（吉田報参照）に記された築構防波堤て，いすれにしても，旧港の島原の浦かこの近くに所在したことは判断てきるものの，流土，その他，上述した地形の変化は，この波止場を無用のものとし，石材の大部分は持ち去られたか，鎌倉時代かそれ以前の，島原の浦を裏付ける施設遺構てあることは，別項遺物て述べる如く，充分に傍証によって検証てきよう。

第１図８地は，干石見（すくい）施設て，現在も利用価値は充分に残されている。「すくい」は，多分に祖源をたとれは，ジャワ島のシャワ語のチャンティ・スクウにあるらしく[19]，当地方の石垣等，支石墓，古代山城の石積を含めて，イントネシヤ文化の混入するものか多く，これ等の研究と併せて尚将来考究の必要かあろう。

B．金戸山（金蔵山）周辺の石垣　（図版第２，３図）

図版第２，３図に示す石垣の残存物は，旧地形か出てこない以上，かつまた古記に探し出せない限り，不明という以外になく，（５項吉田報文とは別の時代差を含めた事項について）第１図や第２図によっては判断の域を出ないか，第１図の６は，「ナル川」と呼はれ，以前橋かあったとの所伝があり，現実にその橋の基礎石らしいものか残り，これを直ちに第２図－２にみる，寛政

地変後のものとするには，前項波止場遺構との関係，石組の類似形といった点からみて，直ちに同意することは出来かねる[注20]。(ナル川とは，古くは今の大手川の名称である。)

C．金 戸 山（金蔵山）「図版第4図－1，2」

第5項吉田報文にゆずりたい。

金蔵山は，金戸島とも呼はれる大手浜は，江戸時代島原の花街かここにあり，この渡し舟賃か2分てあったため，2分渡（にふんと）といったということを，報者はかつて古老に聞いたことかあった。

なお附記したいことは，地名の「金」文字て，当地方の多くの鉄遺跡関係地名に，類似の「金」字地名か多く，近くには第2図－2にみるように，風呂屋丁か堀町の東側にある[注21]。風呂屋の集まった町てあった訳てなく，西有家町の製鉄遺跡の横を流れるのか「フロ川」て，砂鉄の水洗いと関係かあり，当山上ても鉄滓か出土，杉谷の鍛冶職，か砂鉄をこの地より採取したとのこともあり[注22]，製鉄との関係かあったように考えられるか，確たる資料か今のところ得られてない。

D．石干見（すくい）「第1図8地点及び写真図参照」

A項て若干ふれたか，遺跡地に近接した列石遺構てあり，有明海沿岸地区報告によれは[注23]，施設の内容，態様，仕様，名称等述へられてないか，附随する多くの名称は，東南アシア方面からのものとみられる多くの語か混在し，（例えはオロクチ「水門」，ドンク「一種の神籬て祭石」等）この種の存在は東南アンヤ，五島列島，有明海沿岸等てみられ，陸上では神籠石[注24]等となり，同一積法と構造てあることは，古代航海文化との関係から，今後特に注意されなけれはならない。

註　解

15　板倉氏の島原築城は元和9年「1623」から，7ケ年の歳月を要し，浜の城，寺中城，原城，深江城等の石垣を利用した。松浦市ニケの浦の防壘(元冠の頃のもの)と積み方に類似点か多い。

16　承久3年(1221)後鳥羽上皇か北条義時を討たんとした謀議に参画した藤原光親の子，父の罪に連座して承久3年7月12日鎮西に流された。

17　高来島(たくしま)，度島(たくしま)等古書や，中国書「日本考」等にみえているか，有馬(間)島は，度島の「まくら詞」か。しまはるの浦の「まくら詞」かとも考えられるふしもあり，古代地名考上今後万葉集等を手かかりとして考研の必要かあろう。

18　愛野町と森山町の境。古田「合津地峡」島原鉄道株式会社，S．31－9
山崎光夫「沖積世(新石器時代)における大陸交通と諫早地峡並ひに愛津地峡」九州大学教養学部地学研究報告第5号，1958－2

19　「大法輪」11月号，S．55－11－1刊所載チャンテー，スクウ参照
古図に記載はなく，寛政地変後のものとみられるか，積法の伝承は注意されよう。

20　ここては何等遺物資料もなく，防波堤資料をここに適用することもはばかられるので，不明遺構と

しておく。

21　古田「製鉄遺構を伴った小原下　遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告第９集，Ｓ．54－６所収第３表

22　現地の火山灰土（上表上）では約平均７％の砂鉄か包含している。

23　長崎県教育委員会「有明海沿岸地区の民俗」長崎県文化財調査報告書第11集，Ｓ．47－３

24　鏡山猛他「おつほ山神籠石」佐賀県文化財調査報告書，1965，本報では山城説を決定つけたものてあり，朝鮮との関係を一義とされてきたか，島原半島を初め長崎県関係のこの種のものか紹介されてないため，ここては単に南方との関係のみを示唆しておくに止めておく。石干見には必す３ケ所のオロクチ（水門）かあり，島原半島有明町湯江には，最近まて石干見の積みかえを生業とした技法の所持者か生存している。

3. 各トレンチの状況（第１，４図，図版第26図）

１トレンチ（第１図，第４図－１，２）

１トレンチは，巾２m，長さ５mを１区分とした，それぞれ１より12までとし，各区は，略巾２m，長さ２5m，深さ約１5m前後まで発掘し，中には２mに及ぶ深さまて掘り下けたものもある。

発掘面積は60㎡に及ぶか，各トレンチの基本的層序は，１層は暗褐色砂土の表土，２層は黄褐色砂土層，３層は暗灰色砂層，４層は暗茶褐色砂層てあるか，自線形成の時間差によって小礫層か混り合い，いうなれはトレンチ一つ一つか異なる有様て，例えは１ｔ－３の如きは，３層～５層に粘土塊や，灰色火山灰土の含む層か入ったり，赤褐色の小礫層か入る状態て，いすれのトレンチを見ても，包含遺物からみて近世以後の形成て，発掘出来る可能な深さまては[l25]，層の形成の変化はあったか，近世のものはかりてあった[l26]。

２トレンチ（第１図，第４図－２，３）

２トレンチも，１トレンチ同様巾２m，長さ５m区画を12とし，別に３㎡を設定２トレンチ13とし，このトレンチも約60㎡の試掘を実施した。

２トレンチの地層層序の基本は，１層暗黒色砂層，２層黒褐色砂層，３層灰色礫混層，４層黒褐色砂層，５層小礫層，６層礫層，７層褐色砂層，８層小礫層てあるか，２ｔ－４，２ｔ－５てみるように，８層まて明治期の磁器か包含し，近世というより，最近の形成層序とさえいい得る状態てあった。

３トレンチ（第１図，第４図－３）

３トレンチは，２トレンチにクロスしたもので，約25㎡の面積を発掘したか，層序の形成は，２トレンチと変わることはなかった。

特に３ｔ－５は，２ｔ－４，５と類似した遺物の包含をみた。

４トレンチ（第１図，第４図－４）

４トレンチも前者同様の区画の５つを試掘，その全面積は約25㎡てある。

４トレンチは，１トレンチにクロスしたもので，層序の形成は４ｔ－１のみか，１層に若干の貝殻を混入する，薄い砂層か乗るものの，その他は１トレンチ同様てある。

５トレンチ（第１図，第４図－４）

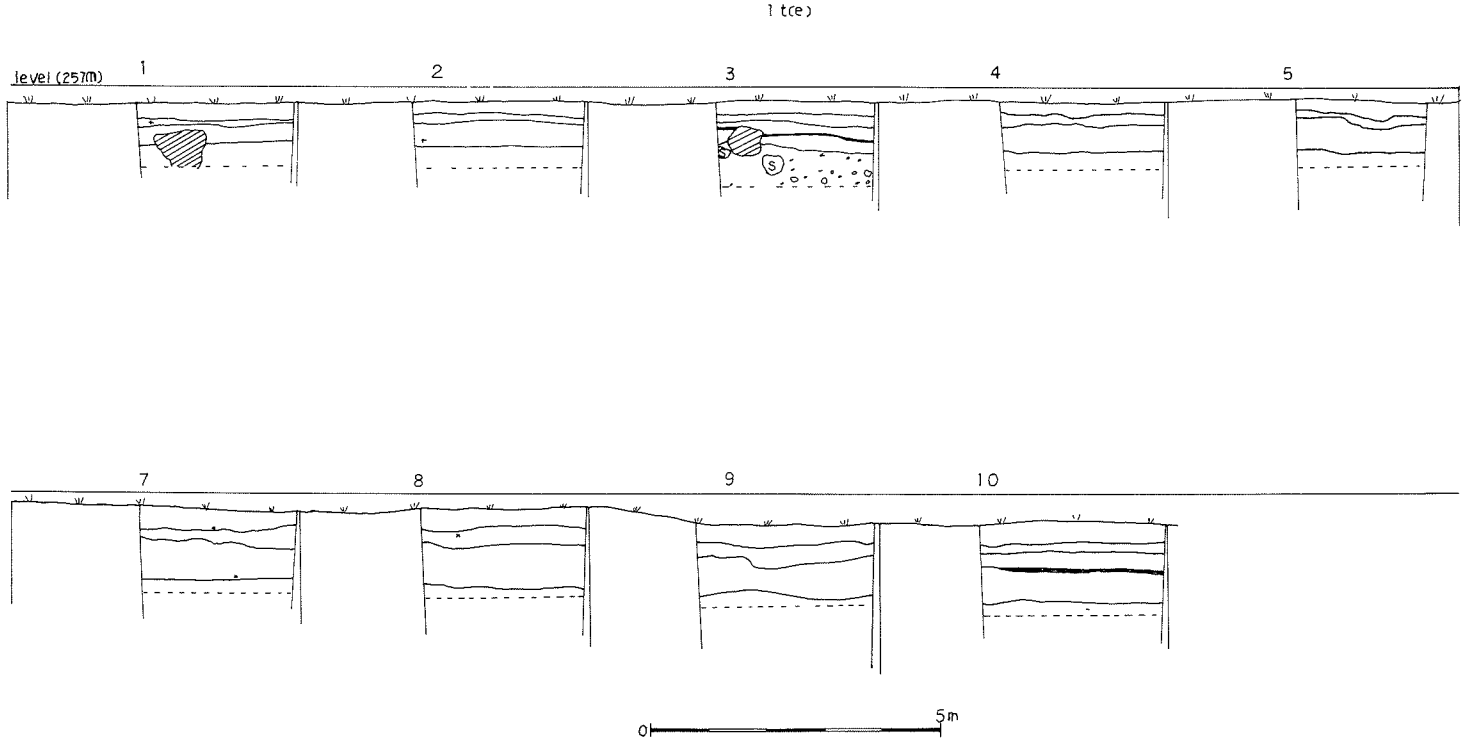
５トレンチは，１トレンチとＬ字状になるような形て，１ｔの南の旧農道上の小高い（20～30cm高）土地に設定した。３トレンチの層序は，１層は暗黒色砂層，２層は褐色粗粒砂層，３層は灰色砂層，４層は褐色砂土層，（旧道路上面層かも知れないという感かもたれた）このトレンチては，５ｔ－１，５ｔ－２の，３，４層に骨片，陶器等，江戸後期の遺物を含み，多分にこのトレンチの３～４層は，寛政地変時の形成層かとも判断てきる状態てあった。

６トレンチ（第１図，第４図－５）

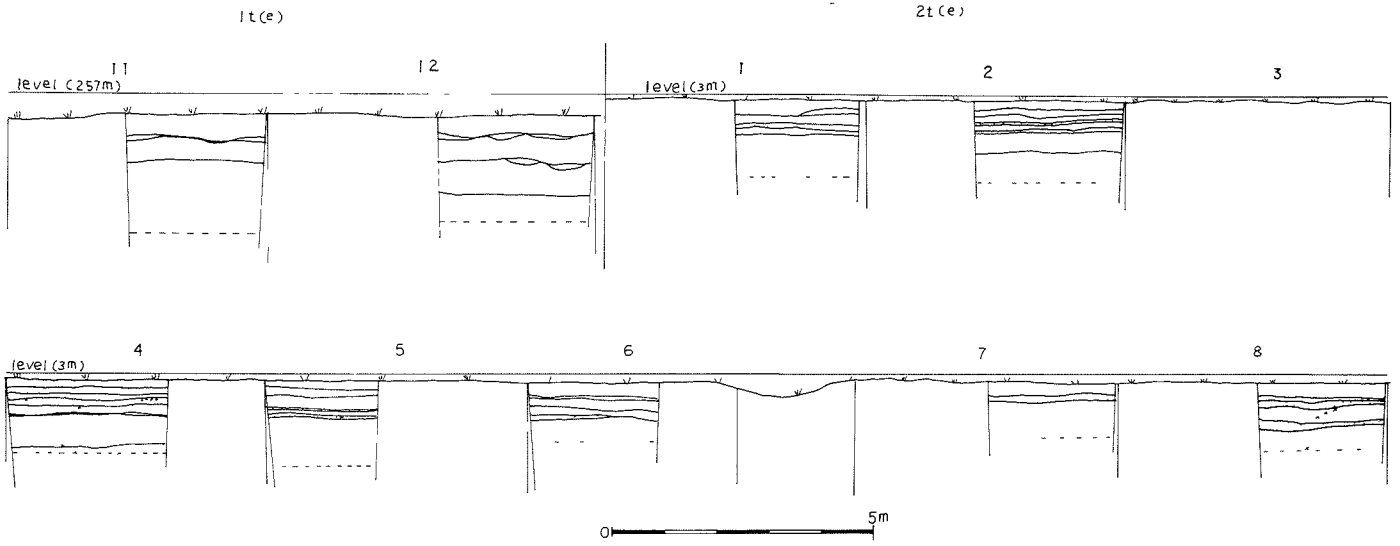
６トレンチは，７層まて最近のカラスひんの破片か包含して，最近の形成砂丘地てあった。

第4図　各トレンチ図

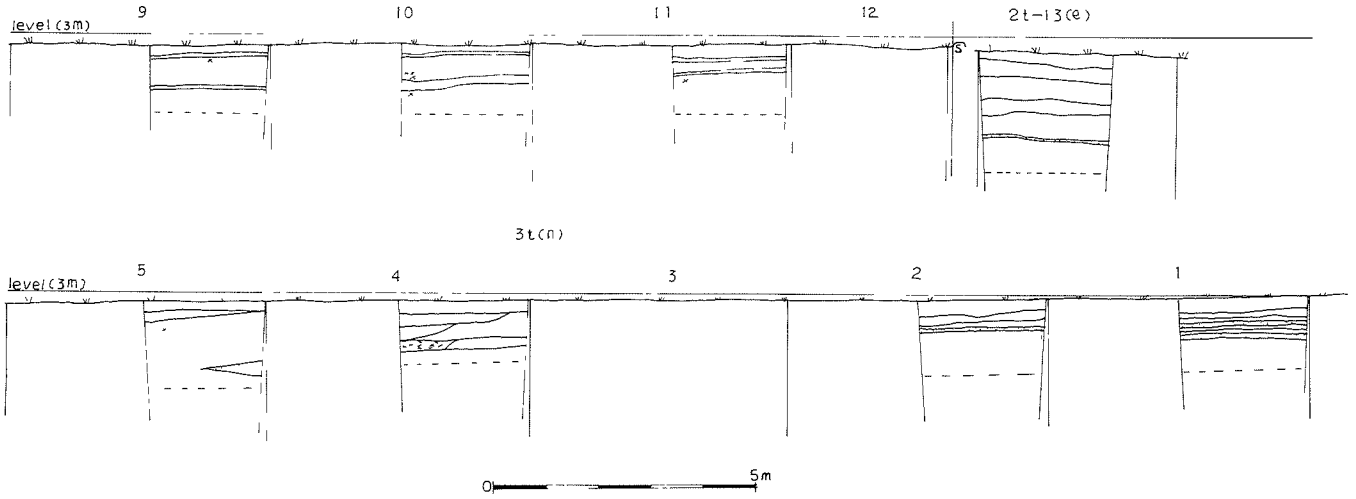
1．　1トレンチ1～10



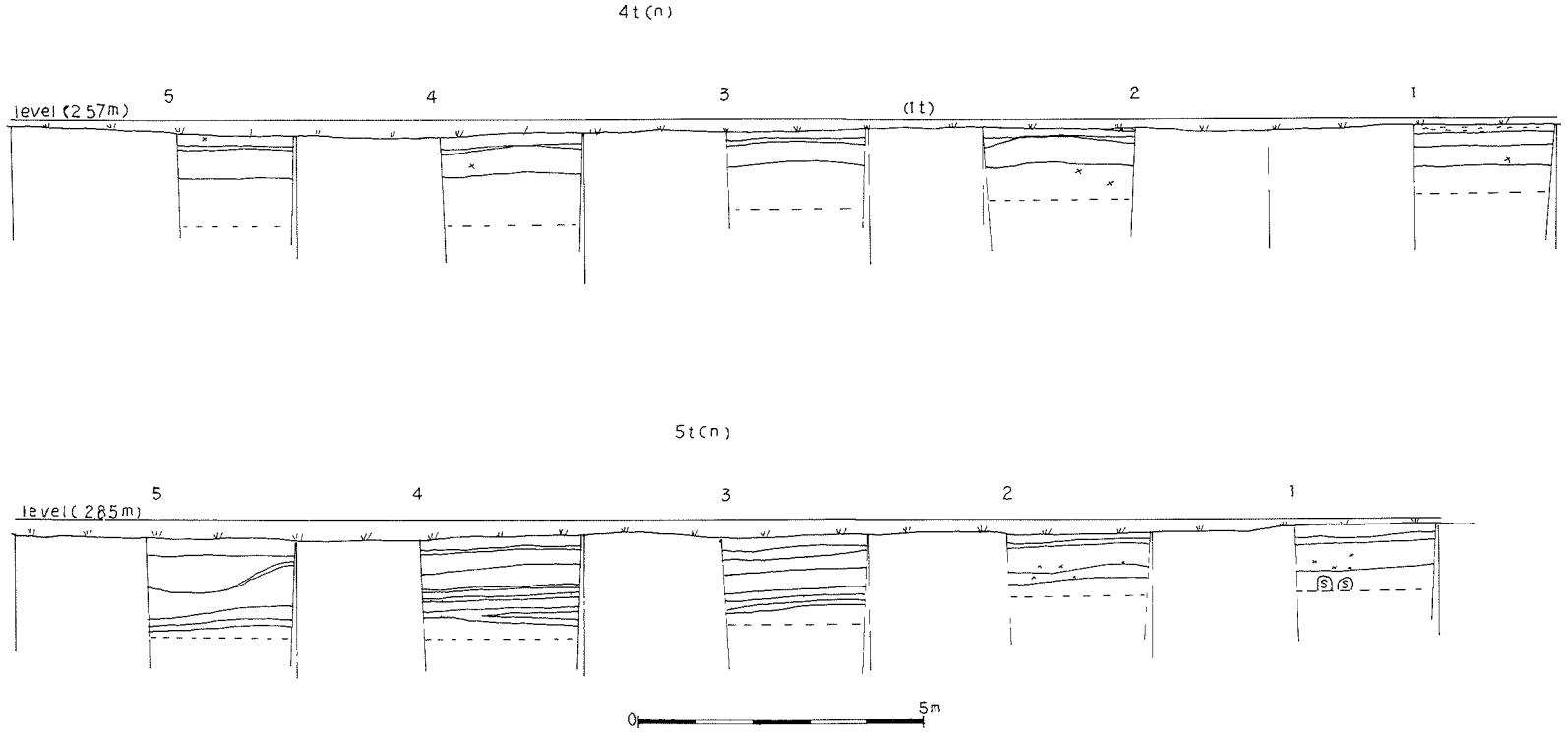
第4図－2　1トレンチ11, 12　　2トレンチ1～8



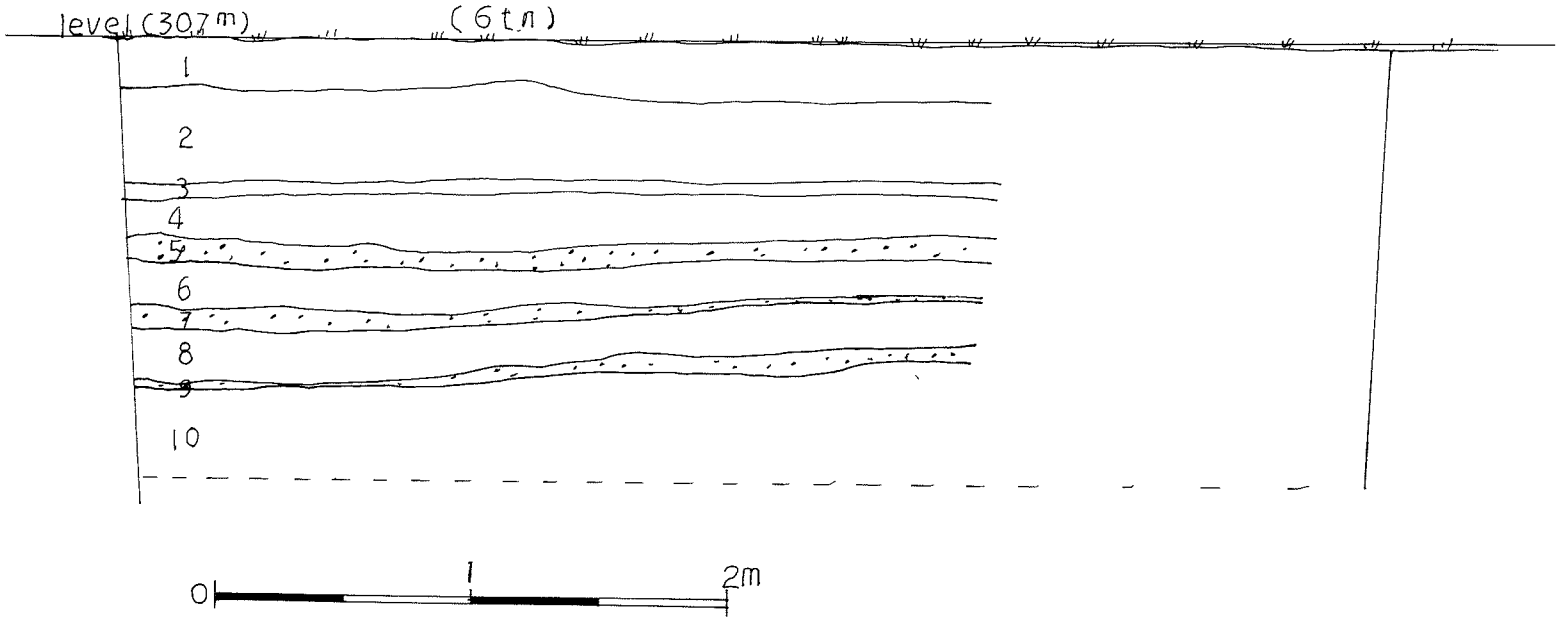
第4図－3　2トレンチ9～13　　3トレンチ1～5



第4図－4　4トレンチ1～5　5トレンチ1～5



第４図－５　６トレンチ(北側)断面図

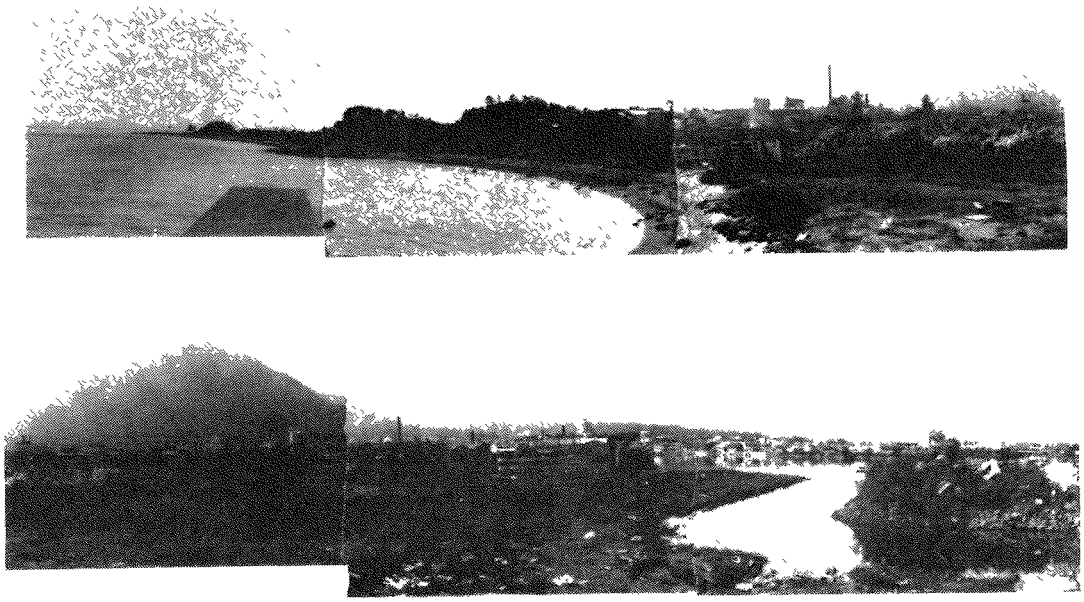


6トレンチは，旧防波堤基部砂丘上に設定，5㎡の試掘を行なったか，層序は，1，4，6，8，10の各層は灰色砂層て，2層は暗褐色砂層，3層は混礫砂層，5，7，9の各層は，小礫層てあった。うち，1，2層は風成層らしく，3層以下か海波成の層とみられたか，各層の包含物は上記のとおりてある。

註　解

25　2m以上の深さては潮水の湧出かあり，大潮時，あるいは満潮時には40cm位の深さて潮か入り発掘困難な状態てあった。

26　江戸後期半半頃より古いものはない。



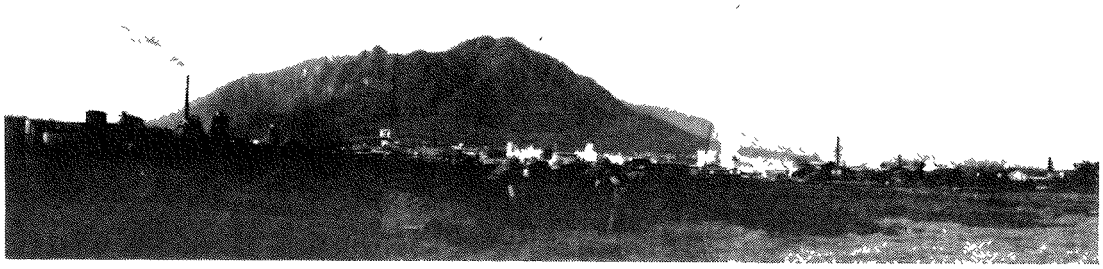
第5図　　大手浜遺跡全景（上・下続き）
（註）上の左は南，それより右に廻る。「南--南西—西—北西」

4. 遺　　物　（図版第5図～第16図，図版第27図）

大手浜の遺物については，従来部分的な報告かあり[127]，特に注意しておきたいことは，土師器に圧痕された網目文土器の出土か知られ[128-1]，更に改めて述へなければならないことは，縄文土器の採集か新たに加わったことてある。その様相は，多分に三会下町海中干潟文化の後，晩期のものと類似していることてあるか，523等は，舟元式系土器てあるか，曾畑式に属するものてあるか，器面摩滅か甚たしく，197，278，304，372，422，423，559等の土器同様，編年上の決定か困難なことてあるか，とはいえ，縄文文化か相当期間，この地に断続かあっても，存在した事実てある。

184，563の阿高式土器の採集，73の如き鐘ヶ崎式[128-2]，419，528，555，563の黒川式土器の採集によって，両文化の存在は確実にされ，73，197，278，304，372，422，423，559 土器は，黒川式

第　6　図



第6図　　発掘調査現場と背後の島原市街（東より西に向かって）

ないしその平行期に比定できるのてなかろうか。石器は摩滅か甚たしく，又，述へる程の資料はない。先史，原史遺物の，数の上からては，遺跡の主体は土師初期文化てあり，64，99等の，土師系祭祀土器は，そのほとんとか防波堤下部より出土し，多分防波堤の構築と関係あるらしく，近くてはH之江城[129]，守山城[130]，南有馬町金比羅遺跡[131]等て出土し，古記，口碑等によって上記の年代か推定できる。最近の報告例にみるこの種糸切底の土師器は，園田市城跡[132]ても知られている。

したかって鎌倉時代，あるいはそれ以前の構築とすれは，別記の古歌とも符合するものかある。

246は土師系赤褐色の小玉て，1t－10，4層上面より出土したものたか，多分土鈴の鈴玉かとみられ，土鈴は，長崎県内ては深堀遺跡より出土例かあり[133]，神田畷遺跡[134]等との，祭祀関係か猛島神社祭祀と関係をもつ，奈良～室町期頃に比定できるものかも知れない[135]。323，533は，黒灰色の瓦器て，上記土師祭祀土器と平行する文化の所産とみられよう。

3，242，248，257，472，572，537は土錘て，中世以降のもので，各時代も区々てある。

A27，550は土師器て，製塩土器の脚かともみられる[136]。類似するものに 510かあるか，これは陶

器で，製塩土器と関係を持つか，ホーロク（焙烙）等の持手か不明。（古墳後期より奈良，平安朝期の盌の把手もある。）類似品は，同市杉谷地区からも出土例かあり，（報者保）後者に比定される可能性か強いかも知れない。（五徳の足とも考えることかてき，鳥取県米子市福市遺跡て飛鳥時代のものとみられるものの出土かある。―考古学シャーナル―13，1967－10，考古ニュース）

A32は刀の鍔の破片て，刀剣金具はこの他にも出土し，猛島神社に対する奉献物か，ある時代急激な地変に会い，流失したものの残存物かも知れず，この地より２個の丁銀も採集されている。[ｎｆ37]

A30，181，200は須恵器乃至須恵質の焼き物て，古式のものは含まれていない。376（２ｔ－10，５層出土），491（５ｔ－５，４層出土），501（６ｔ９層出土），508（左同），509（左同）は筑後瓦で，対岸よりの移入品かある。

陶器，磁器，ガラス器，これ等は近世から現代物て，述へる必要かなかろう。（陶器，磁器は県内の波佐見，佐賀県の唐津物と，若干の伊万里物か入っている。）

210は石製の紡錘車とみられるか，文化的背景は不明てある。

図版第27図，写真図１図の329は不定形石器とみられ，一般にいわれる双肩状石器てはなく，三会下町海中干潟に類例か多い。

第　７　図

第７図　　金戸山（金蔵山）全景（南西より）

註　解

27　前出6，10，古田「縄文文化期に現われる布痕土器」のとり文化12，S．35－9

28－1　本土での土師器の組織痕土器は知られているか，九州では少ない。鏡山猛「原生期の織物―九州の組織痕土器を中心に（上・中・下）」史淵84，86，89，S．36－5～38－1

古田「組織文土器と縄文晩期の文化航路」島原史学会第1回総会発表要旨　S．37－5

28－2　田中寸夫「北九州の縄文土器」考古学雑誌26－7，S．11，

杉山方栄男「筑前筥ヶ崎の縄文土器」考古学5－4，S．9

29　北有馬町所在，近藤吉喜氏巡視報告，報者実測図保

30　吾妻町，昭和55年11月，古田安弘氏と町史資料集収中採集

31　住居跡内より他遺物と共に出土，確実な年代を推定できる状態であった。前出5

32　鼎次雄「園田甫城跡出土土器について」響灘の刷20号，1980－12－15

33　長崎大学医学部解剖学第2教室「栄堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号　1967，現物は長崎大学保管

34　前出3

35　古田「古代祭具」のとり文化21，S　40－9　平安期のものとして宮城県刈田郡蔵王町久附地区，「考古学ジャーナル」考古ニュース，51号，1970－12，奈良時代のものとして，愛知県尾西市起の橋川川床，「考古学ジャーナル」13，1967－10，考古ニュース

36　資料にAを附したものは，報告かS．31，32年に採集し，その中て（猛）とあるものは，猛島神社に贈呈し，同社に保管されているものてある。

37　1個は報者か採集，現在林医院長　林敏信氏保，他の1個は片町の漁師か採集保管されている。

5.　遠見番所と島原教会について（図版第29図）

1　諸越舟（もろこしぶね）と島原の浦

書き出てて　猶またしはし島原に　諸越舟の便を待つらむ

藤原光親は，承久の乱(1220)に連座して，幕府方に斬られたか，その子光俊も又，父の罪により鎮西の国に流された。配流先きは，西国の何処てあるか，はっきりしない。

林銑吉氏は多分島原ではなかったかと，推定されている。この歌は，光俊か「島」と題し作った歌として，「新撰六帖」に収められている。島というのは，松島のことと思うか，光俊のいう島原か島原とすれは，「島原」という地名か，鎌倉時代すてに使用されている。大手浜の砂州か，烏の嘴のように「海路口（うしくち）」を作り，東南部には松島かあって，内部に港かあり，島原の港は，恐らく隠くし港としての役割を備えていたのではあるまいか。

諸越舟（もろこしぶね）とは，唐土船のことて，当時，中国の舟か，島原の港に常時出入りしている。

平安末期，太宰少弐になった平清盛は，特に，宋貿易に力を注き，博多，瀬戸内海航路を重視

したか，一面に又，有明海に関心を示し，九州土豪との密接な関係は，この時代に始まったものと思われる。

有馬氏は，建保年間（1212～1216）に，島原半島に上陸したことになっているか，その出自については疑問か多い。有馬氏は，古代の航海集団の氏族て，島原半島在地の土豪てはなかったという見方か強い。特に平氏との関係か深く，鎌倉時代，すてに平姓を使用している。鎌倉御家人，越中氏，安富氏との所領争いか多く「串山郷」「深江ノ浦」の件は，「吾妻鑑」「深江文書」に記されている通り　　。

有馬氏か，航海集団の水軍とか，又海賊等と呼はれるのは，有明海や，野母半島の港の要所，要所に補給基地を置き，海の豪族としての海運を行っているからてあろう。

口ノ津港の，古名を「越巣港」と言った。その口之津の港を中心に，有馬氏は，串山，深江，島原の港に拠点を置いている。

深江の浦には，深江氏（有馬彦五郎），島原には，有馬経純の末弟島原殿（純尚）を送り，その港を管理している。島原の浦は，平安末期から，土豪有馬氏の勢力圏内にあったものてあろう。

古代，中世を通し，大和朝廷は，朝鮮，中国との対外交易に力を注いたか，常に海上ルートは北九州か表玄関てあり，有明海は，九州の中心に位置したものの，裏玄関として忘れられかちてあった。それたけに又，変幻自在の活躍の海てはなかったか。

島原半島は古代から，中世，近世にかけて，東南アシア，中国，朝鮮との頻繁な交渉かあっている。その航海民の文化遺産か，各地に豊富に残っているのに驚かされる。

「越族は，竜をトーテムとして，あらわれる。」江南の水は，東支那海を沿岸沿いに，交流し，山東省から一衣帯水，西南朝鮮，対馬の海峡に出て，海流を利用すると，自然と九州に入る。交易者にとって，日本は魅力に富んたところてあり，至る所，良港あり，気候は温暖て物資に富んていた。朝鮮半島に比へ魅力かあった　　と，考古学者てあり，民族学者てある，日分直一氏は「東アシアの古代文化」の中て，こんな風に言っておられる。

島原半島の各地に散在する古代遺跡から，上記の説を裏つけする幾多の報告書か提出されている。

「島原の浦」は，古代交易の，重要な，航海ルートの要津てあったろうと推察される。

さりけない路上の道祖神や，荒廃した神社寺院，小祠等の石造物や，忘れ去られた習俗の中に航海民のもつ竜神，蛇信仰等の名残りか，ありのままの姿，又，隠し等の様式て，今日まて伝わっている。特に市内ては，三会，杉谷，理没しなかった旧市内の石造物（竜神，猿石，猿田彦，稲荷）に，その影響は顕著てある。今自，島原地方ては，神に仕える神職を「蛇トン」（シャートン）と呼ひ，祈禱師を「伯竜さん」と言っている。「寛政地変」の報告書を幕府に提出した，天野銀左衛門の資料によると，市内には，昔「高麗小路」「丹官小路」「タンコシュウン）かあったと記され，「高麗小路」は，今日の水頭通り，「丹官小路」は中堀町，三勇堂附近と推定する。「丹官」とは中国古代の高位高官の意て，古代，中世を通し，島原は，朝鮮，中国との深い関係にあったことか証明される。

2. 松島と大手浜（第2図－2）

古地図によると，大手浜の岬一帯は；南端が霊立公園の高ン山に続き，（現在金蔵山と高ン山の間は切断され，その間を汐が出入りしている。）烏山台地（旧専売局，現在島鉄バス駐車場）と延ひて鷹島の突端を抱くような地形であった。又，その一帯を「天ノ島」と呼んだとあるか，その地名は寛永15年切支丹乱後の命名てはなかったか，松島は大手浜の尖端，南端の海に葦形に横たわって，島と岬の間を，島原の浦と言っていた。

寛政地変のため，港は埋没して，地続きになり，陸地化して，往古の面影はすっかり失くなった，松島の遺構は，資料や古地図によって，島の輪郭は，ほぼ把握出来たと思うか，（地形変化図参照）未た充分とはいえない。

完全な図上作成は，後日にまつとして　　。

天野銀左衛門によると，松島は，西北端の弁天山か高く，西南，八天山，南端，川竹山と続いていた。今日ては，高地は削りとられ，建物かたてこんて，昔をしのふ面影はない。大師堂（弁天町側）の坂道を登ると，右手，高台に弁財天の小祠かある。その一帯は旧宗像神社の神域てある。今日，町名を弁天町というのも，この弁財天の由来に起因するものてあろう。弁財天は島の高地に祭られる。（江の島弁天，浜名湖弁天島，琵琶湖竹生島）

弁天山には白鷺か群棲していた。海岸は絶壁て，海水は深い，弁天山の周辺の稜線は，南東に続いて，（家政学校台地）それから，島原鉄道の創設者植木元太郎氏の旧宅「船山荘」へと続く。その台地の尖端は，島鉄敷設の際，崩され，土砂の大半は，霊南地区造成地と化したという。島の南端，川竹山一帯は，高地の大半か削りとられている。そして，その台地には，妙見菩薩のお堂と，その脇に八大竜王の碑か建っている。それから台地は，坂上，キチン山（浦田上）に連らなり，西端は，八天山へ続いたと思われるか，現在はすっかり変貌して，複雑な町の様相を呈している。

霊立公園の南端の高地に，「潜龍園」という神社がある。この神社はもともと，松島の一角に鎮座ましていたのてはないか。

植木元太郎氏邸の「船山荘」の登り口に，「川龍」と刻んた雄渾な書体の巨石か，とっかり座っている。旧松島地区の町並の所々に「八大竜王」の碑かひっそり建っているか，松島は緑したたる松を依代とした「神の宿る島　竜の潜み住む島」てはなかったか。

3　島原教会について

有馬義貞の要請に基づき，ルイス，テ，アルメイタは，有馬氏を訪ね，安徳に立ち寄り，島原純茂を訪ねたのは，永禄六年（1563）のことてある。純茂はキリスト教に対し，関心か強く，仏教徒の反抗の中にあって，アルメイタを手厚くもてなし，教会設立のため，敷地を与え，便宜を図ったのは，同年6月のことてあった。その敷地と教会跡は，従来，弁天山一帯といわれ，すてに定説化している。

先般，出版された，フロイスの「日本史」九巻（中央公論社版）P80に，（註12）

「島原の町は，寛政4年のいわゆる「島原大変」の火山爆発によって大きく変わったか，寛政

地変前の島原の古地図か，島原に残っていて，「日本史」の二つの個所の表現，文意か明らかてないように思われるか，地変前の古地図に比へるとよく合致し，教会の地所か，「現在の弁天山てあることか，明白てある　　。」

「即ち，昔の島原港内の城，東の北側から∽字状に岬と島か突出していたのてある。弁天山は，島原純豊の居城，浜の城と相対して，島原港の一大美観を呈していた。弁天山は，市役所，南約七百米の地点にある。　」と記され，教会跡の地所は，「現在の弁天山」てあることか明白てあると，松田毅一博士は断定されているか，

私は従来の弁天山説には不本意て，合点かいかない。松田博士訳「日本史」の問題個所を抽出すると，

「同し年（永禄６年）６月７日，修道士は島原に帰った　，　。彼らに教会を建てるための地所としての，その地に於ける最良の一つを与えたか，そこは仏教徒たちかいる所から，遠く離れており，以前には城かあった所て，（この時も）なお地名を留めていた。この場所は町外れにあって，しかも殆んと真ン中にある。というのは，港は二つの半月形をしており，この地所は，真ン中の端にあって，殆んと海に囲まれているからてある　　。

さらに殿は，美しい材木て，この町の中央から殆んと教会の入口に達する橋を構築した。キリシタン達は，満潮時，教会に行こうとすると，水の中を歩行せねはならなかったから　，」。

上記の文章を読んて，翻訳文として，外人特有の読みづらさはあるか，フロイスの島原の地形に対する認識は深い。　　実に明細にして，正鵠をえた叙景文てあると思われる。

従来，「浜の城」は，旧二小跡といわれているか，浜の城は，町の中央部，新木，風呂屋丁，御舟倉長屋一帯にかけて位置していたらしく，堀町は外壕の役目を果たしていたようた。その外壁遺構らしい石垣か，海南荘，富重旅館の下通りの一角に，僅かに面影を残している。鷹島の岬か町の中心点て，∽状の尖端になるらしい。

当時，浜の城を中心にして，外城に，北は弓中城（三会），西は丸尾城（本光寺），南は今村の砦てあるから，当然，南は，海を越えて，大手浜の地続き，烏山一帯に想定せねはならない。

「日本史」によると，教会の敷地は以前城かあったところて，なお城の地名を留めていると記されている。又，烏山には，地変前の古地図に「井楼小屋」という城郭用語に関係のある地名か記載されている。「井楼」とは，木材を横に，井桁に重ね合せ，隅部において，材を互いに組み合せた建築構造て，多分港内の，船の見張り等に使用された楼てはなかったか。しかも，その地所は，町から全くはなれて，周囲（まわり）は海にかこまれ，町の真ン中に位置しているようた。文中に「島」たとは，決して記されてない（弁天山は島）。烏山一帯の地形に，そっくり条件か適合している。又古地図には「天ノ島」と記載かあるか，前述の通り，この地名は教会設立後，呼ひ慣らされた地名てあろう。

天とは「テウス」の意か，この烏山一帯は，現在，旧専売局跡，島鉄バス駐車場から，金蔵山一帯までを比定する。

鷹島をはさんて，南側に白土川，北側に大手川か流れている。今日，鷹島の岸辺に立つと，干

潮時は夕か全く干いて，対岸まて歩いて渡れそうてある。まして当時，白土川はなかった。橋は簡単に架けられたと思う。それに比へ，天野銀左衛門の報告によれは，弁天山は松島一の高い山，海岸線は絶壁をなし，その上，海水は深い。架橋すること自体，容易てはなかった。まして山一帯か宗像神社の神域てある。

永禄６年は，キリスト教か島原半島に入りこんた初年の年て，フロイスの「日本史」にもあるように，仏教徒の抗争か火蓋を切ろうとする情勢下，　　領主純茂は，みすみす争乱を引き起こす無暴さは考えなかった筈。

又同時代の伊勢神宮文書に，神宮御使，宮後三頭太夫の「肥前地方の旦那方(在地領主)」の記録かある。当時，島原半島の領主は，国主有馬氏にならって，一面てはキリスト教を尊き，又一面ては伊勢神宮の大麻を受けて，多額の金子を寄進している。

その心情たるや，誠に複雑てある。

私はこのような視点から，島原純茂か与えた教会の地所は，大手浜地続き，古山一帯から，金蔵山附近までと推定する。

4.　遠見番所について

文化５年（1808）英国軍艦フェートン号の長崎入港に端を発し，その責を負い，松平図書守康英は自刃，弘化２年1845）には，米国軍艦か通商を求めて浦賀に来航，俄かに諸外国との交渉かさわかしくなったりして，幕府は，浦賀や，観音崎に台場を築いた。そして，弘化４年（1847）又嘉永２年（1849）に，諸大名に令し，領内の海岸の地形や，防禦施設について，緊急報告をさせ，沿岸警備を厳重にし，砲術の訓練と，台場を構築させた。遠見番所や，台場の歴史は，旧藩時代の末期頃て，歴史としては新しいか，わか長崎県の場合は，天領長崎港か，鎖国の窓口て，オランタや，中国との交易かあったりして，特殊な状況下にあった。

南蛮交易明細記（吉川弘文館発行）における野母遠見番，ならひに，烽火山の条に，「寛永15年，榊原飛弾守，馬場三郎左衛門か，長崎本行の時，松平伊豆守か，２月島原帰陣の際，長崎に立ち寄り，港の要害を巡視した。外国船か入港の時，港の外から見届けて，報告をさせ，突然の来航の場合は烽火を挙け，江戸まて，次々に合図をするための場所を検討し，野母崎から海中何の障害もなく，見通してあるから，遠見番を立て，疑わしい船を発見したら，直ちに長崎本行に通報させた。

寛永18年（1641）に出島を設け，新に入港するオランタ船や，中国船に備え，長崎港入口の最狭部に当たる戸町（天領）と対岸，西泊（大村領）の両所に，それぞれ，戸町，西泊番所を置いた。この二つの番所を併せて，千人番所と呼んた。千人近くの者か勤務していたことによる名称てある。

金蔵山の遠見番所については，古田氏の報告にある通り，遺構の基礎は古いか，石垣の組み方は，年代的に古くない。地震や台風の度修築されたものてあろう。この遠見番所は，寛永15年以降，長崎の遠見番所と並行して，築造されたものと推定する。寛政の地変前の古地図に遠見番と

記載されているところから，他藩に比へると，その歴史は古い。

天野銀左衛門の記録によれは，寛政地変の際，「遠見番所流失」とあるか，恐らく基礎は，そのまま遺って，地変後，その上に再び構築されたか，又は台場施設の附随と共に修復，改築されたものてあろう。何れにしても，同し基盤の上に何回となく，手か加えられたことは事実てある。当該場所は，島原浦の咽喉部に当たり，古代，中世を通して，港に出入する船舶の見張り，監視には格好の場所てあった。この遠見番所には，３ケ所の台場か附随して，第１台場は，田町海岸供養碑附近，第２台場は，猛島神社旧海浜ホテル附近，第３台場は，長浜明石旅館附近てあった。

その一帯は，すっかり変貌して，台場の面影は全くない。金蔵山の番所は，写真の通り，石垣は３段組て，台上に登る通路も，はっきりして，全然破壊されていない。監視の場所は，有明海を真向いにし，東南北か一望に見渡される台上の前面部て，その背後は１段低くなっている。周辺部に基礎石か残っているのは建物の跡と思われる。3間・真ッ角の小舎と思われる，警備員の詰所か，又は各台場への指令所てはなかったか。？

北面の一角か破壊されているか，これは，戦後の頃，大阪某なる者か，埋蔵物発掘のため，掘削った跡とか，その場所以外は整然とした遺構てある。全国の遠見番所や台場か，宅地造成や，整地のため，殆んと破壊されて姿を消したか，金蔵山遠見番所は，規模年代においても遠見番所として稀少価値かあり，歴史的に意義かあるので，その保存取扱いには，細心の配意と配慮か望ましいと思う。

（吉　田　安　弘）

参考図書

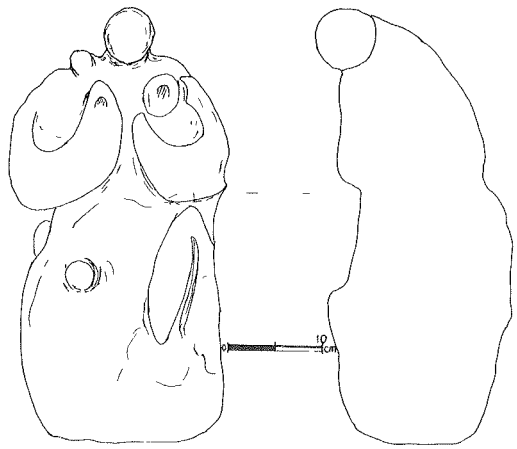
日本史　フロイス	9，10巻	松田　毅一	中央公論社
日本城郭大系	17巻	長　崎　編	新人物往来社
新長崎年表	上		長崎文献社
島原半島史	上下	林　　銑吉	
華蛮交易明細記			吉川弘文館
噴死の長崎奉行		戸部新十郎	新人物往来社
日本文化とその周辺		国分直一博士記念論文	
築城の歴史			小学館
伊勢神宮文書			田後三頭太夫
寛政地変報告			天野銀左衛門
寛政地変前古地図			八幡神社 中村貞義　蔵

6.　猿　石（島原の浦所在資料の一つとして）「第８，第９図」

ここにいう猿石は，韓国全羅北道益山郡金馬面箕陽里弥勒寺や，奈良県明日香村欽明陵附近て掘り出され，いま古備姫王陵に所在する。従来猿石と呼はれてきたものの中ても，陽根を持つ猿形石像物との，類似性から呼ふもので，製作年代の同時性とか，平行文化性から，あえて石像物を呼べはという意味てはない。

島原市の猿石は，島原市片町（旧三会町）の新田潔氏宅地内に祭られていたものを，柚木伸一，吉田安弘の両氏によって注意されたもので，約40年程前，宅地造成時出土したものといわれ，寛政地変（寛政４年，1792，眉山の崩壊陥没）にあって埋土したものらしく，石材は島原オンシャクと呼はれる，新期安山岩て，恐らく江戸前期頃の作と判断され[註38]，所在地の立地条件を考えれは大手川の下流川口の附近，即ち今大手浜と呼はれる地区の，近接したとこかに島原の浦（港）かあったとすれは，まさに港より山に向う入り口に当たる訳て，この類例は，有家町の石像物か旧

第８図　島原猿石写真



第９図　島原猿石実測図

有家港を基点として，高岩山に向う登頂道筋に配置されている例かあり[註39]島原の浦の所在を知る資料として注目すへきてあろう。

この種のものは，対岸熊本県玉名郡木の葉に（現玉名市内）「木の葉猿」として伝えられており[註40]，郷土玩具としては，和歌山県日吉山王瓦猿かある。雌猿形ては，埼玉県北足立郡箕田村三ツ木山王様の石猿かあり[註41]，これらの石像は，益山や明日香のものと何ら変わるものではなく，異とするところは製作年代と背景文化の差てある。ここては猿石を論ずるものてないか，東南アシアに発生した生産文化の，伝播文化の一変化形てあるか，航海人によって持ちこまれた証として，港を基点として発生した，山岳信仰はここても生き続け[註42]，その側面として語るものは，航海集団と港の関係て，大手浜遺跡も，島原の浦との関連において考えるへき，示唆を与えずにはおかないものてあろう。

註　解

38　石材の表面風化と作風を考慮して

39　有家町教育委員会「有家町内における文化財の分布調査」有家町の文化財報告第１集　S．55－3

40　木彫て江戸期末まて護符として作られていた。一名香の葉猿ともいうという

41　西岡秀雄「性神大成」　1956－11

42　発生の基幹は，海上における己の所在を知ることてあったか，高山に神の存在を確信することによって常に神の視界の中にあって，その加護を得る信仰にあった。後には全く農耕生産信仰と結ひつい

てしまう。

7. ま と め

本調査の概要は，述べたような経過と状況であった。発掘調査地は，原始，原史あるいは中世以前といった，遺跡，遺構，又は包含層といった生活面をみることはできず，（防波堤・遠見番所跡は別として）地層形成時若干の流入物はあったか，遺跡地という現実性とは結びつかないもので，遺物についても略述した。然し問題点がなくなかった訳でなく，地学的，防災学的，波浪工学的については，多くの教訓を含み，部分的には以前も指摘したか，今後この地住民の，生活との関わりあいの上で，深く考えなければならない問題である。

特に経済成長という眩惑的語を巧みに利用，土地の投機行為を画策し，更にこれに便乗して，土地造成を計る一部の人々のあることは，その結果がいかなる災害の引き金となるかは，互いの必須認識である。

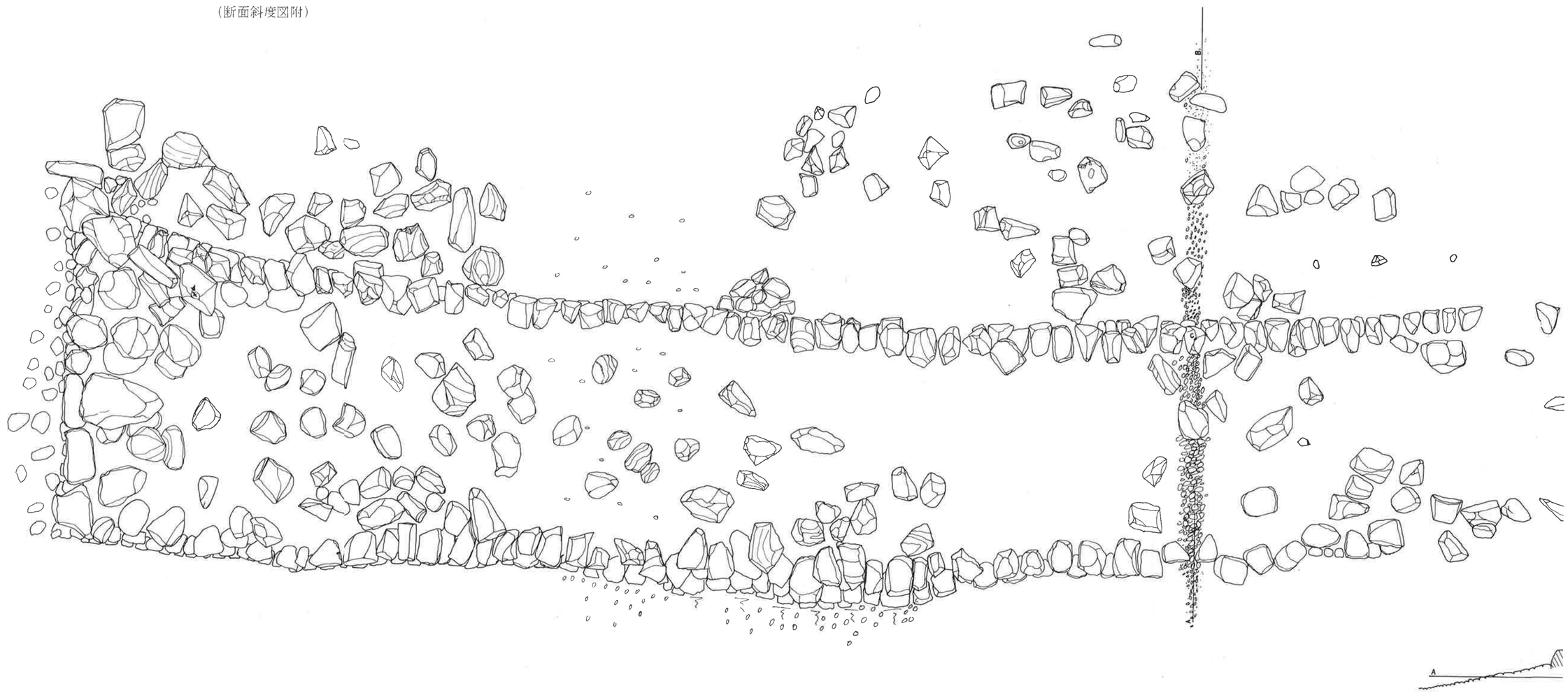
古代人の知恵と調査結果は，如実にこの自然に対する現実対応と，歴史を，時間的空間をもって教えてくれた。

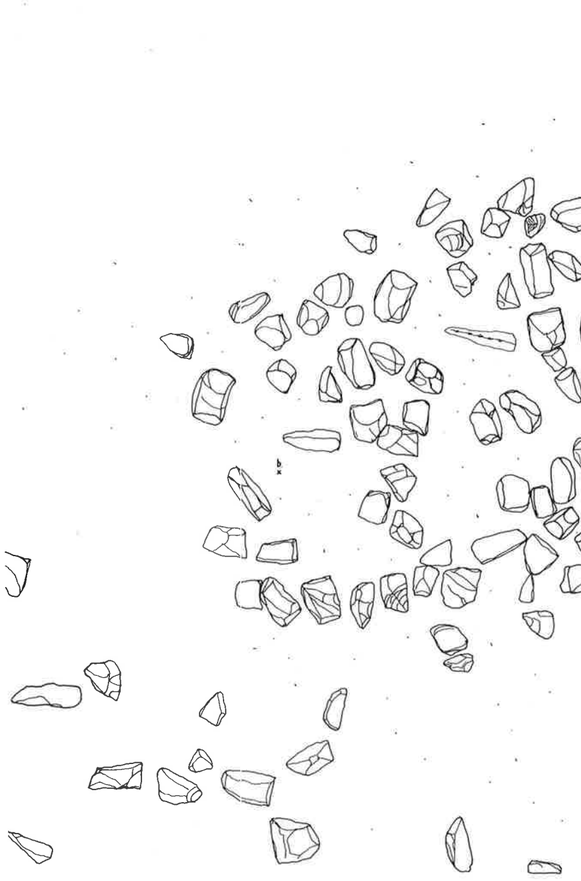
埋蔵文化財の調査の面では，期待した程の成果は得られなかったか，この地には，歴史年代は降るとしても中世後半の防波堤，江戸期中葉以降の遠見番所という，二つの遺構がある。行政はこの遺構から学びとるもの，学問的，歴史的位置付け等，何等かの形で後世に伝える処置を，講じられることを期待したい。

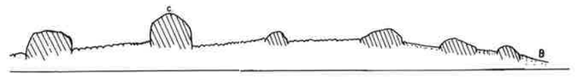
図　　版

第１図　大手浜防波堤実測図（残存部）

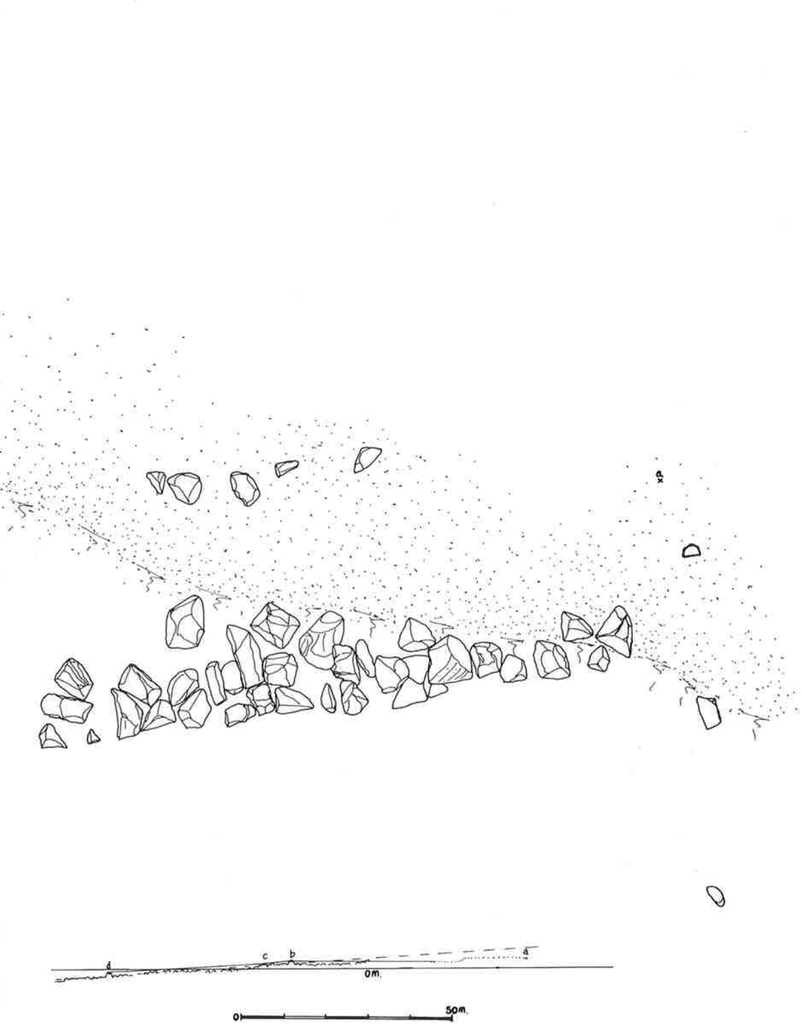
（断面斜度図附）



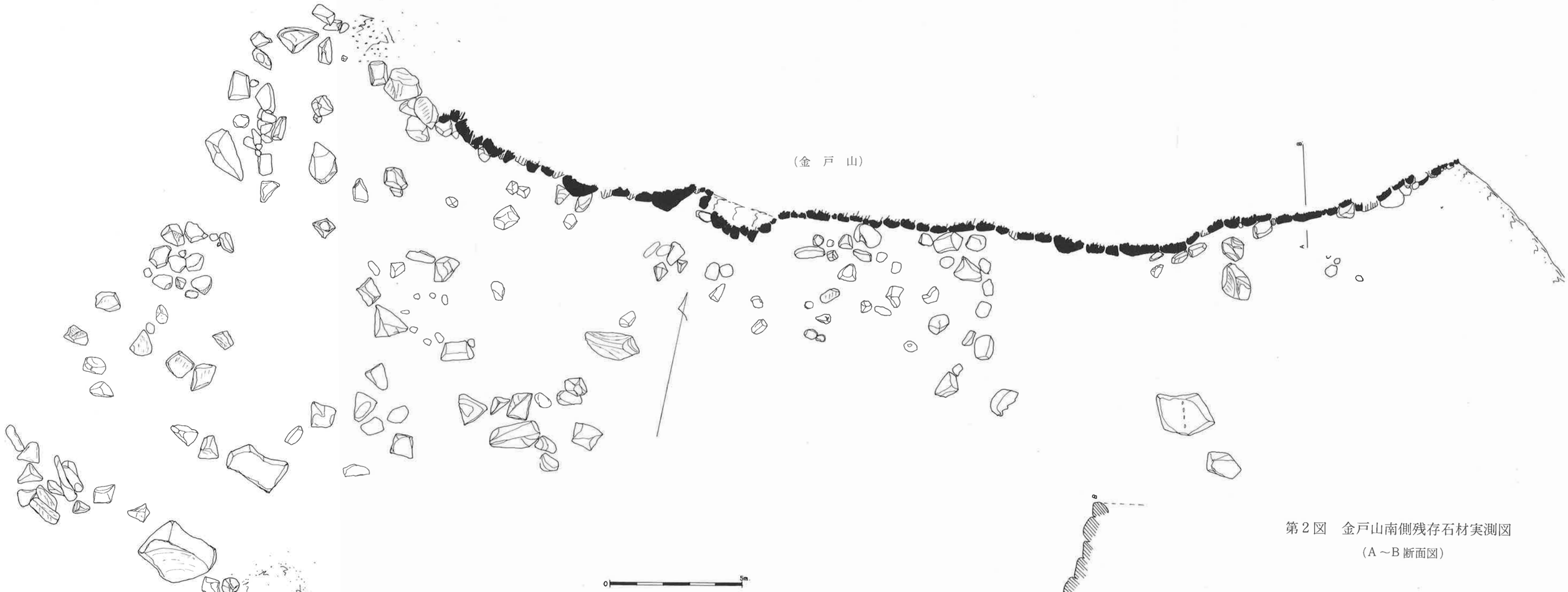


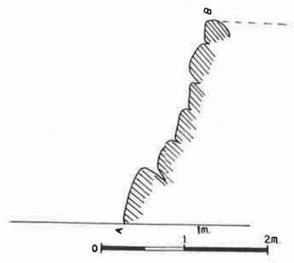


A～B 断面図



a～d 斜度図（a 点は 3 米）





A．B 断面図（B 点：4.60米）

第２図　金戸山南側残存石材実測図

（A～B 断面図）

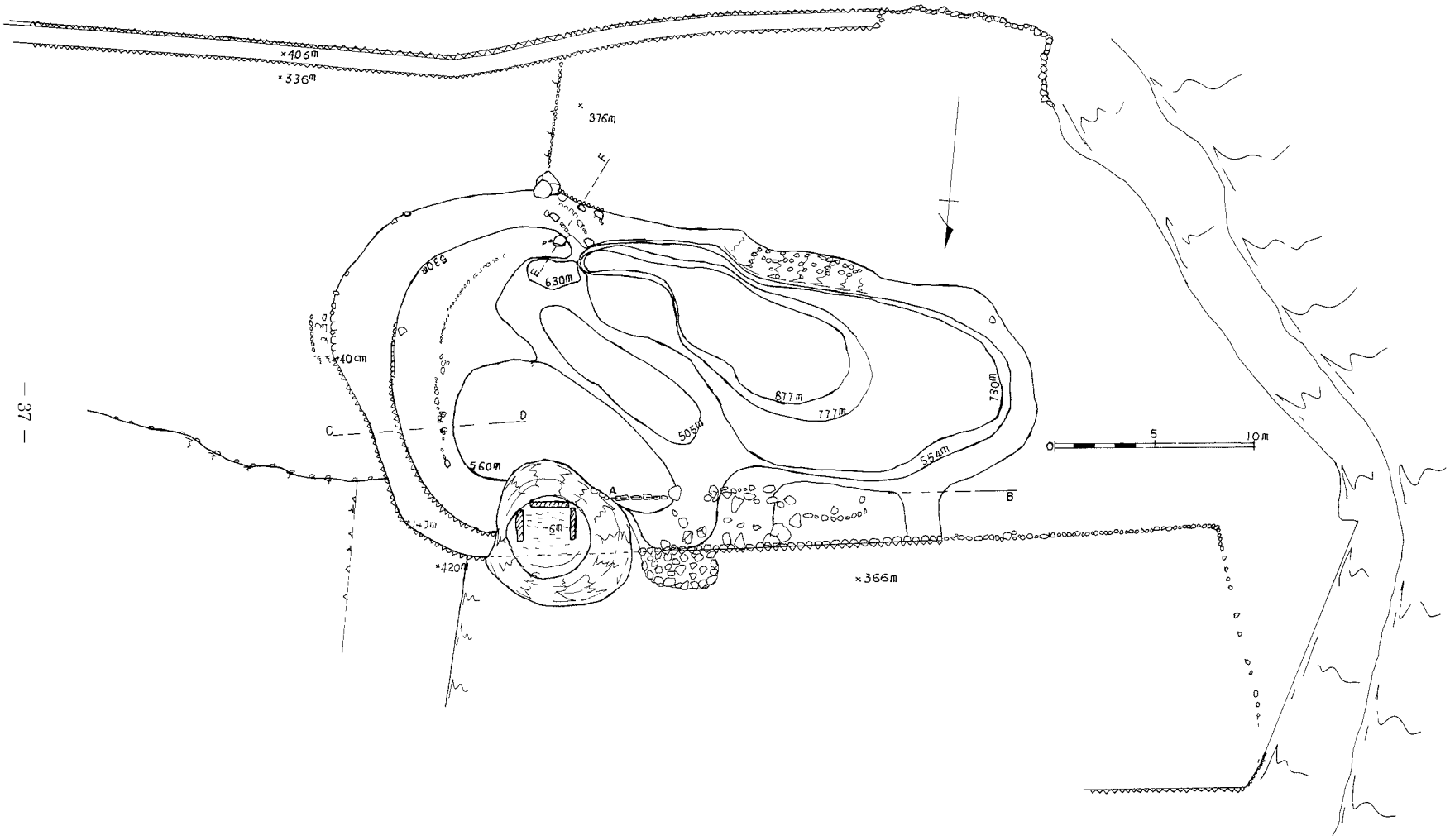
第３図　金戸山西側残存石材実測図

（Ｃ～Ｄ断面図）

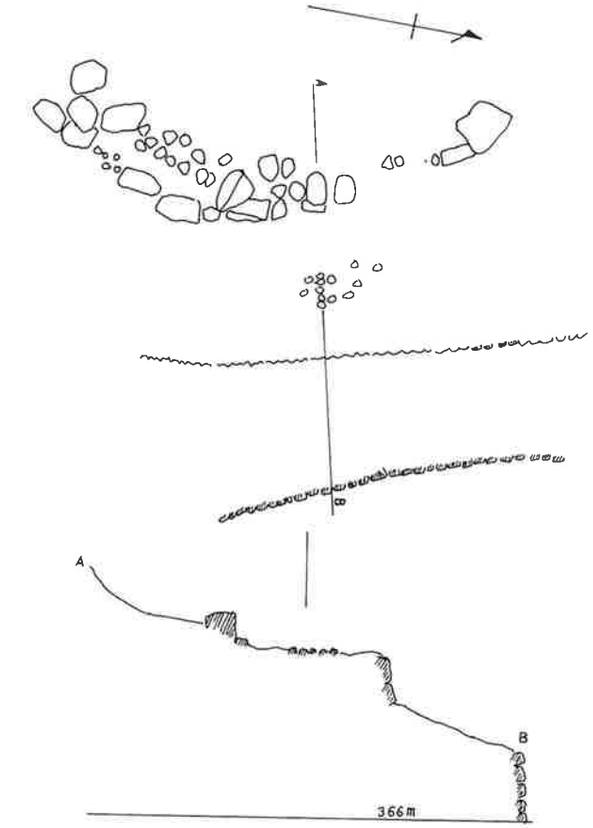
Ｅ．Ｆ断面図

Ｃ．Ｄ断面図（Ｄ点は3.66米）

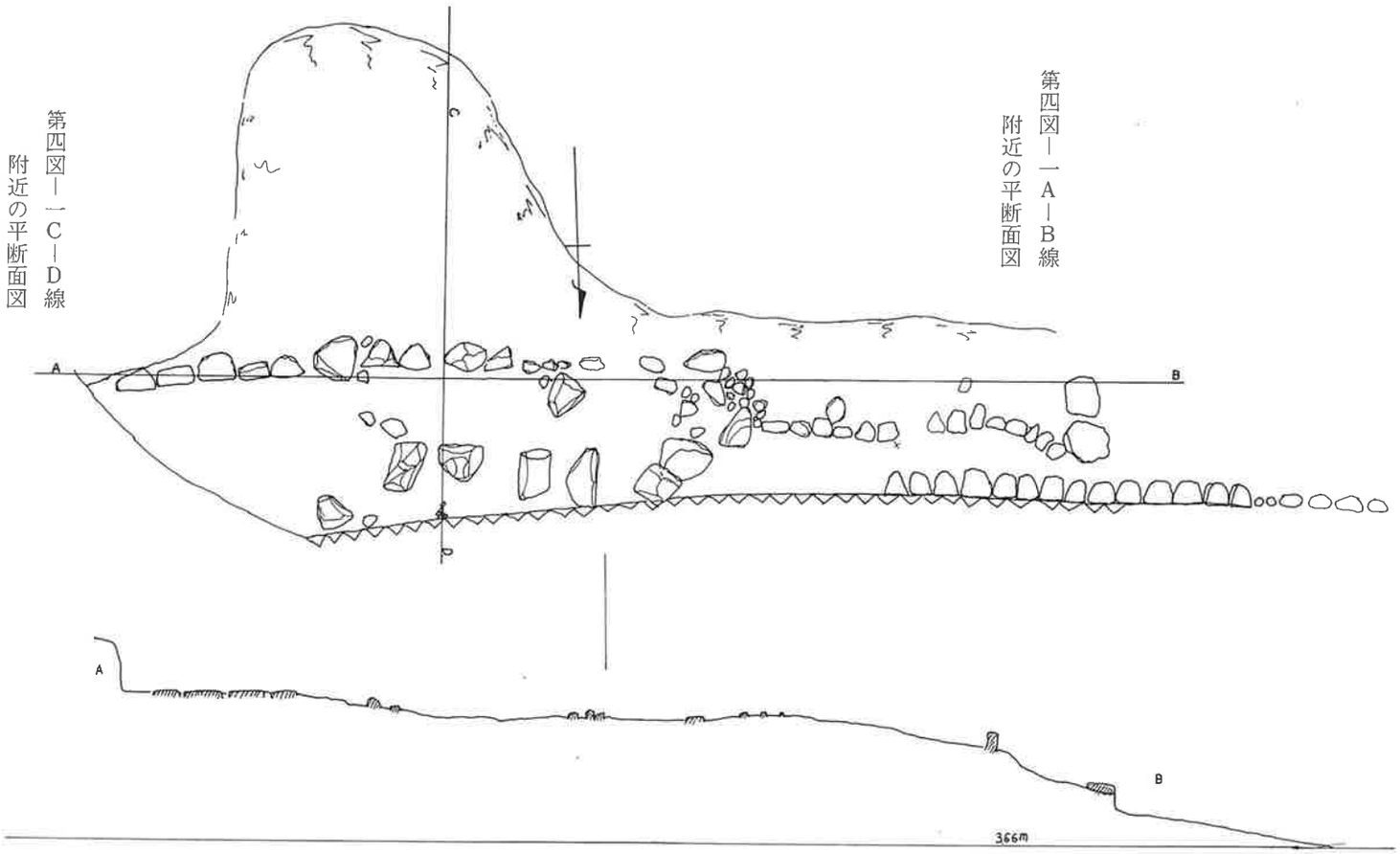
第４図－１　金戸山(金蔵山)実測図



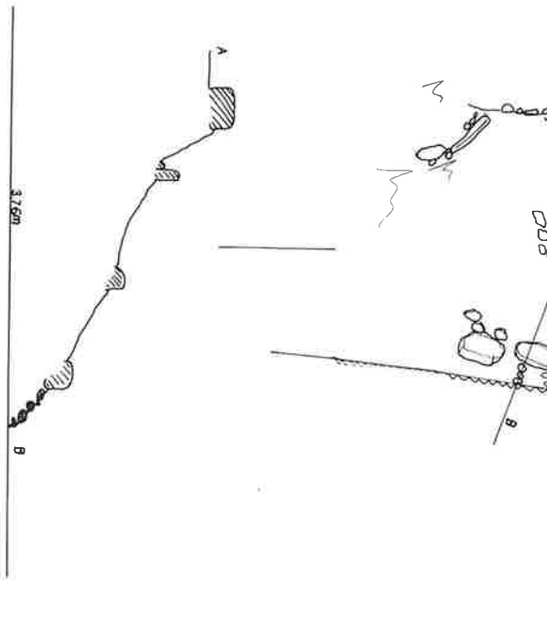
第４図－２　金戸山各部地区の平断面図

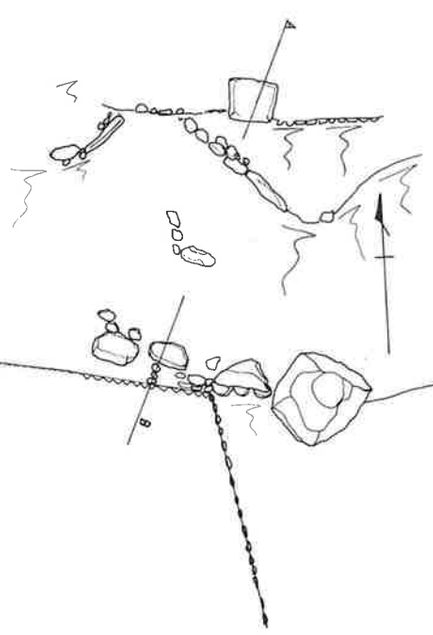


第四図－一Ｃ－Ｄ線
附近の平断面図

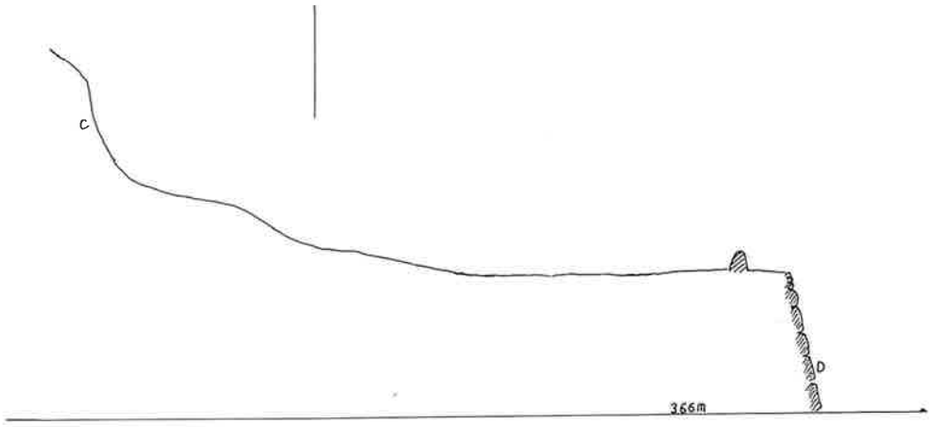


第四図－一Ａ－Ｂ線
附近の平断面図



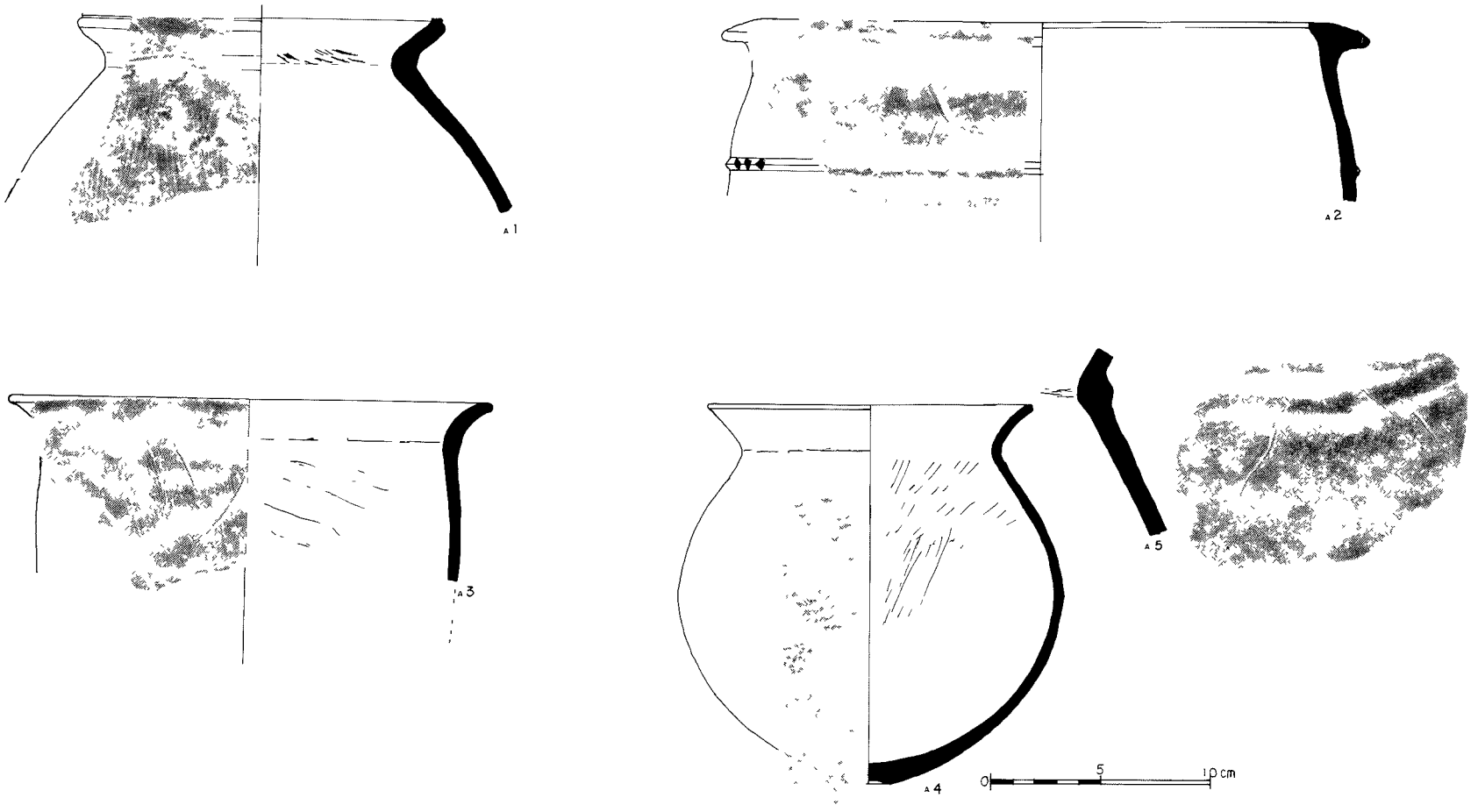


第四図－一Ｅ－Ｆ線附近の平断面図

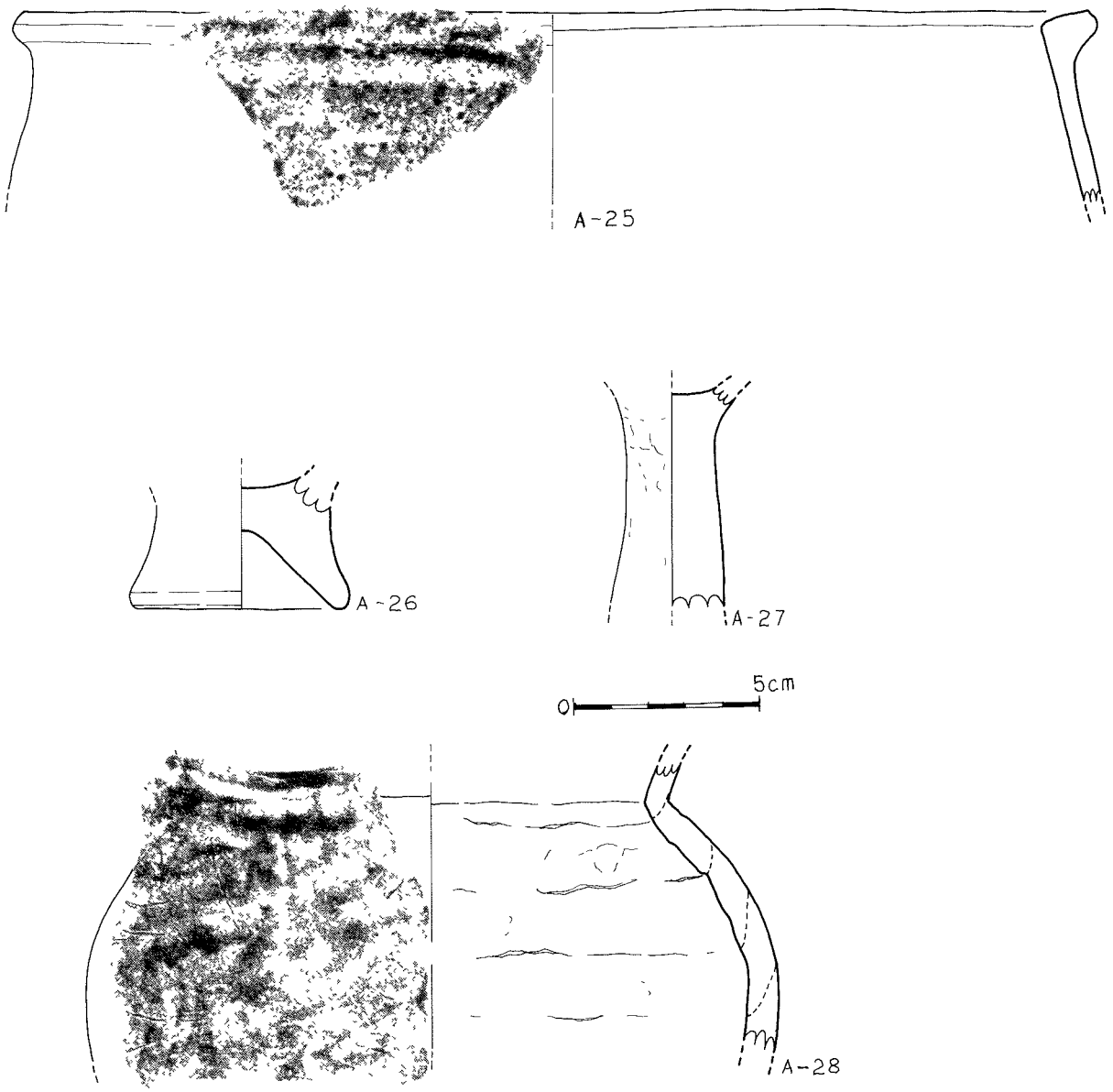


第４図－３　島原市の地形変化図

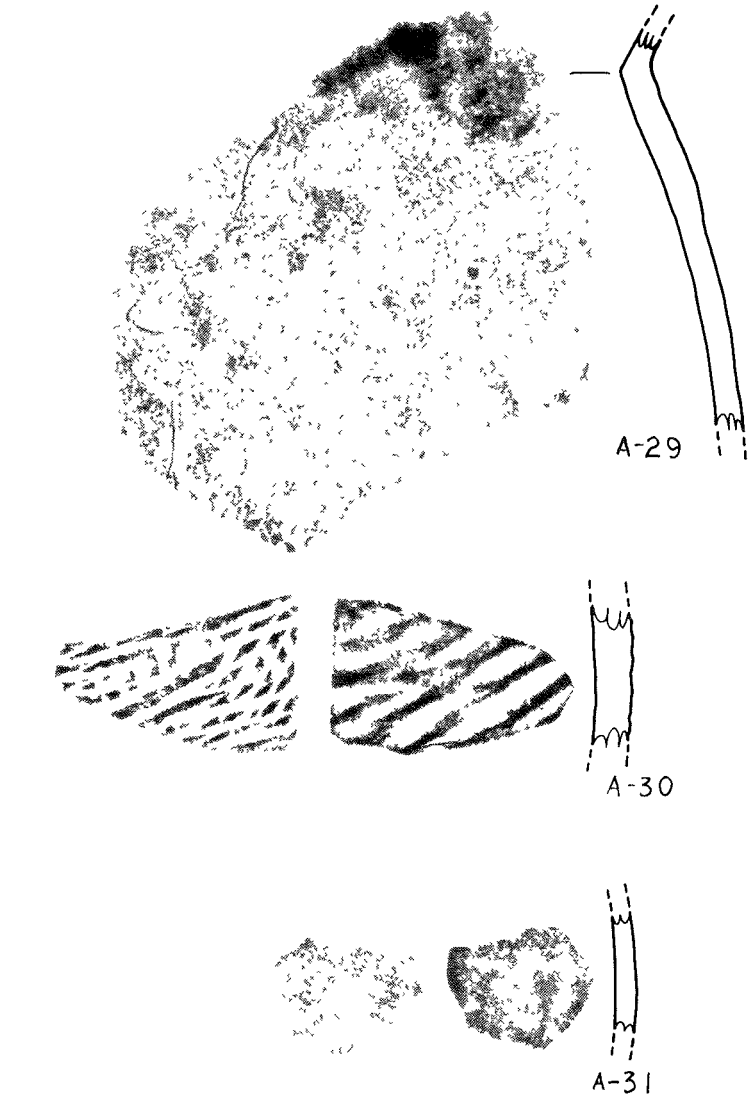
第５図　昭和31，32年採集土器実測図



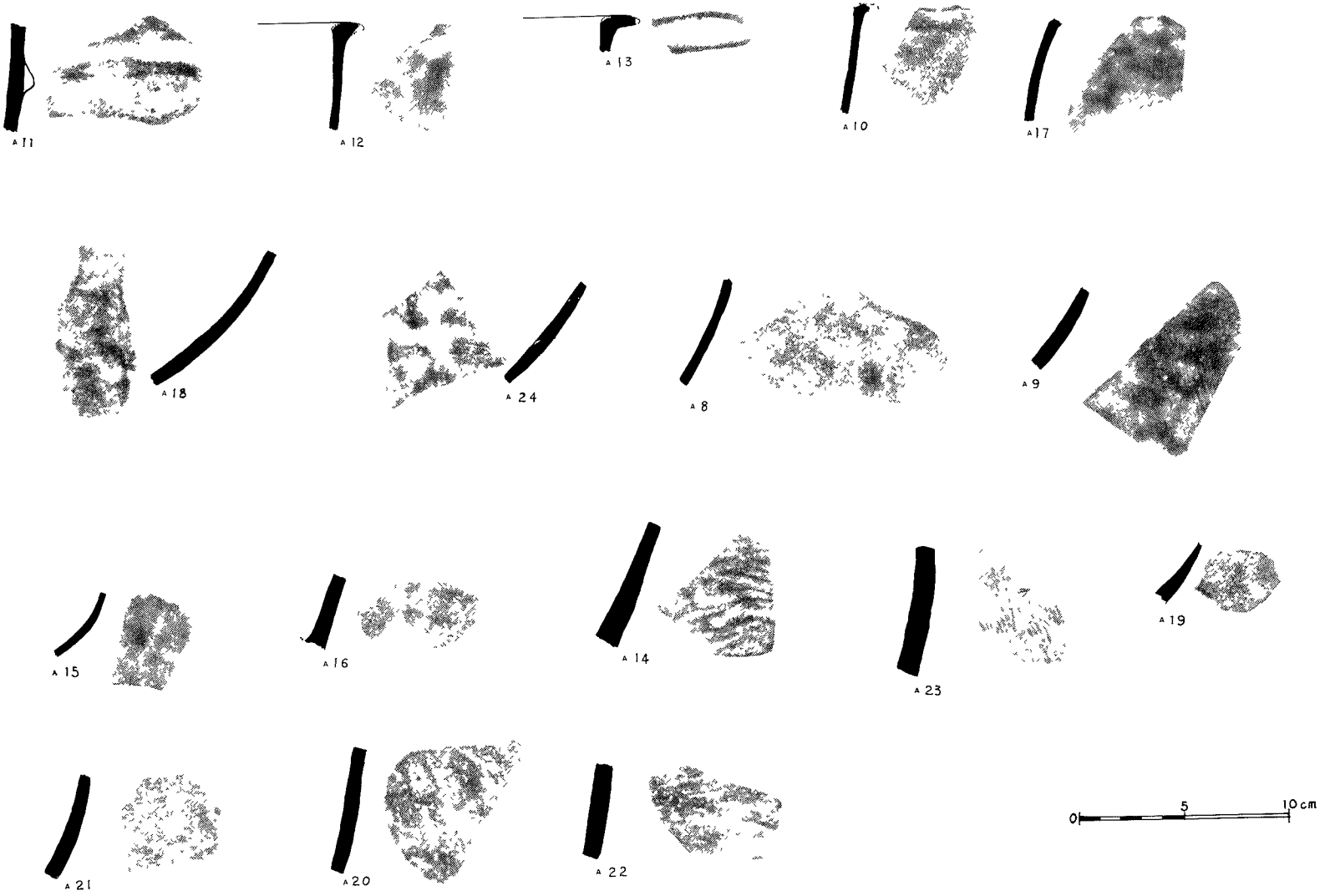
第６図　昭和31，32年採集土器実測図



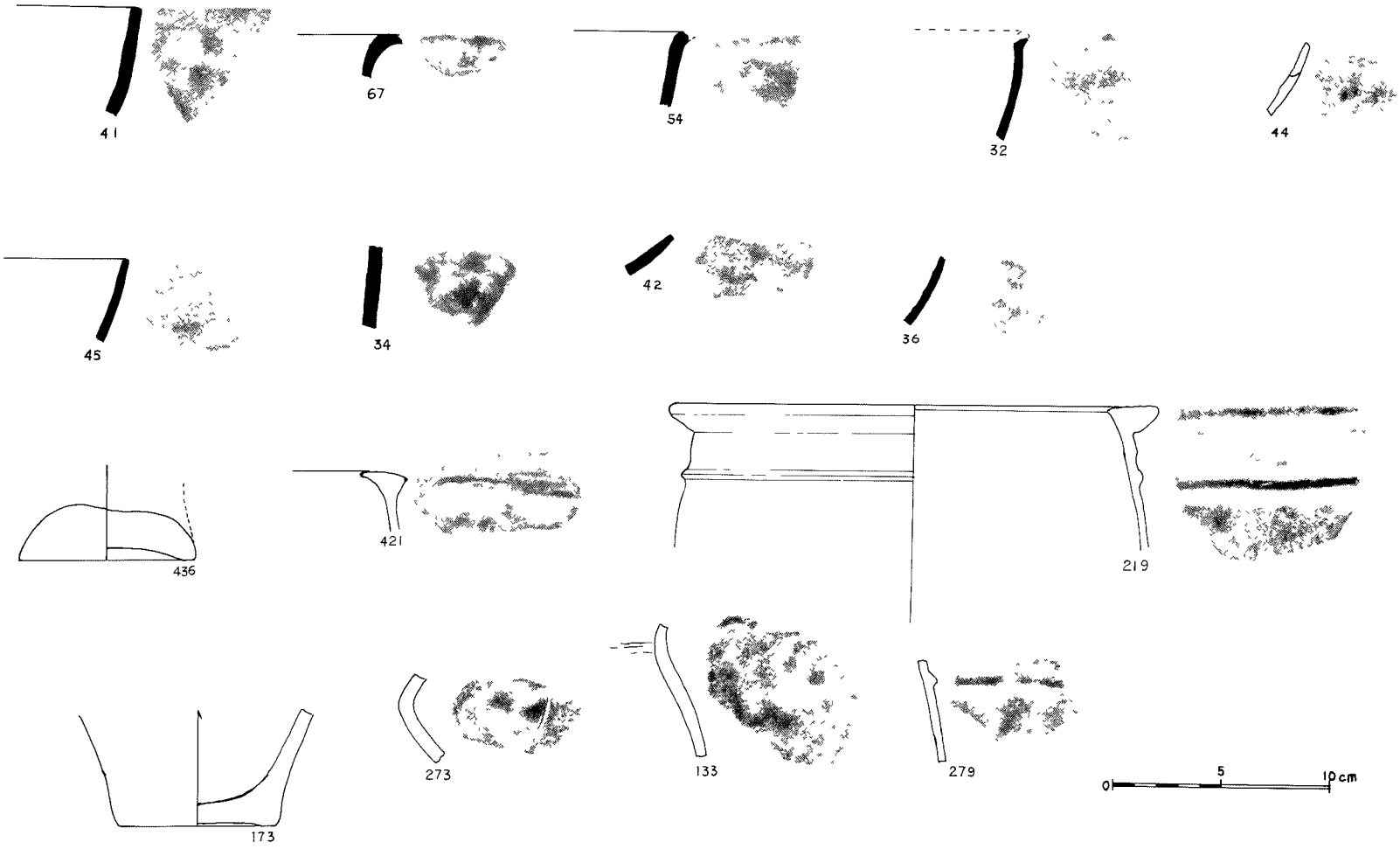
第７図　昭和31，32年採集遺物実測図



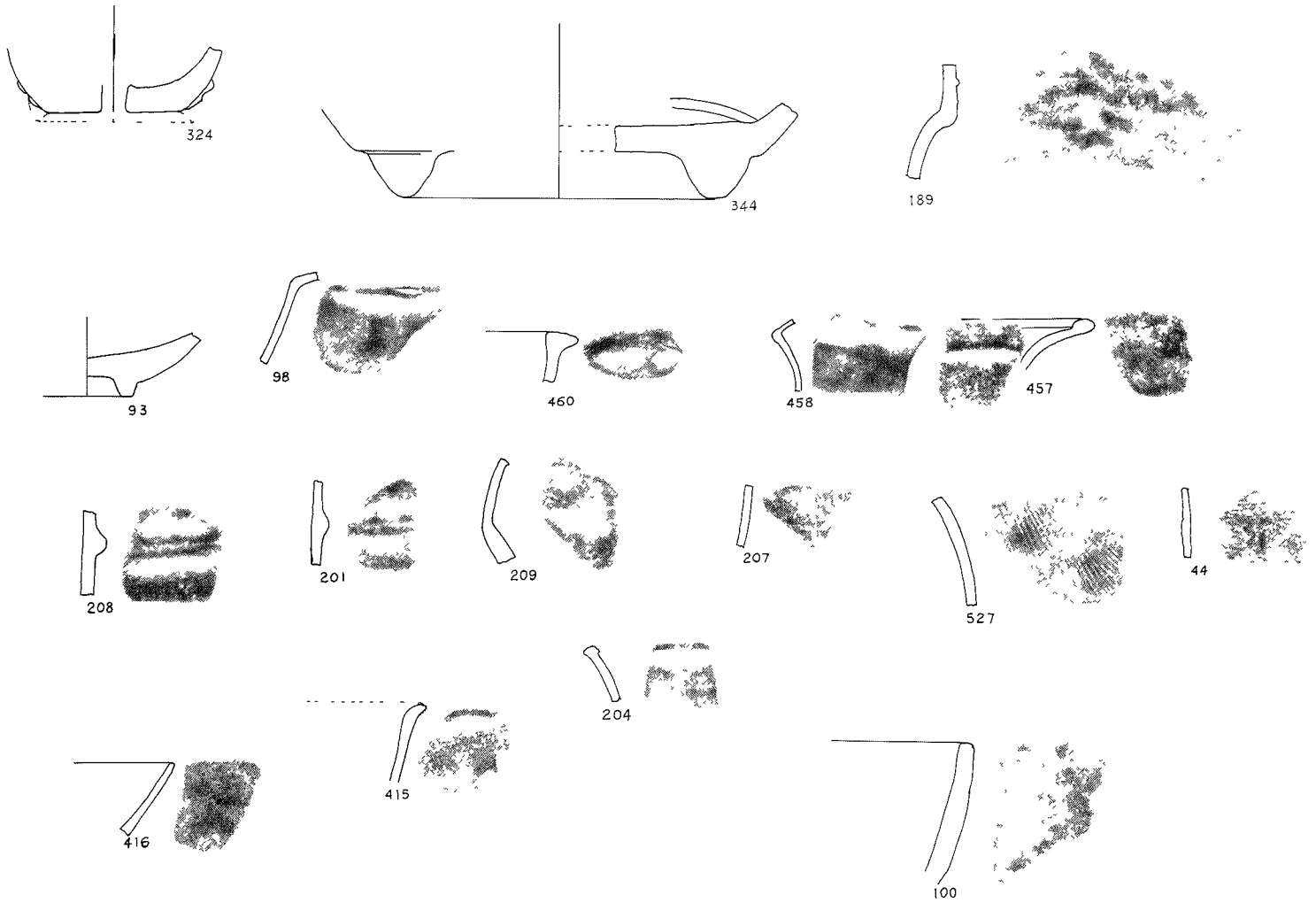
第８図　昭和31，32年採集土器実測図



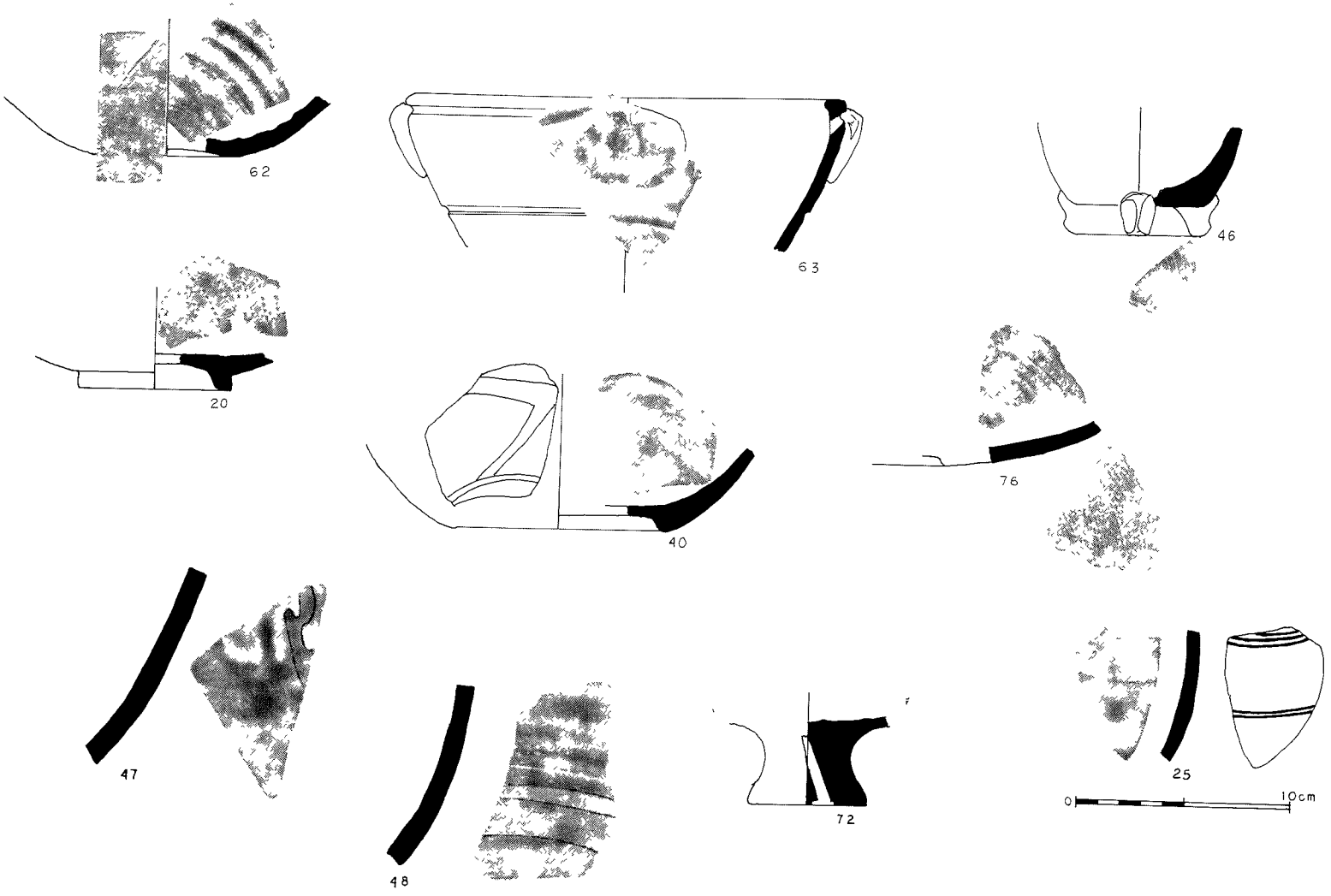
第９図　大手浜遺跡遺物実測図



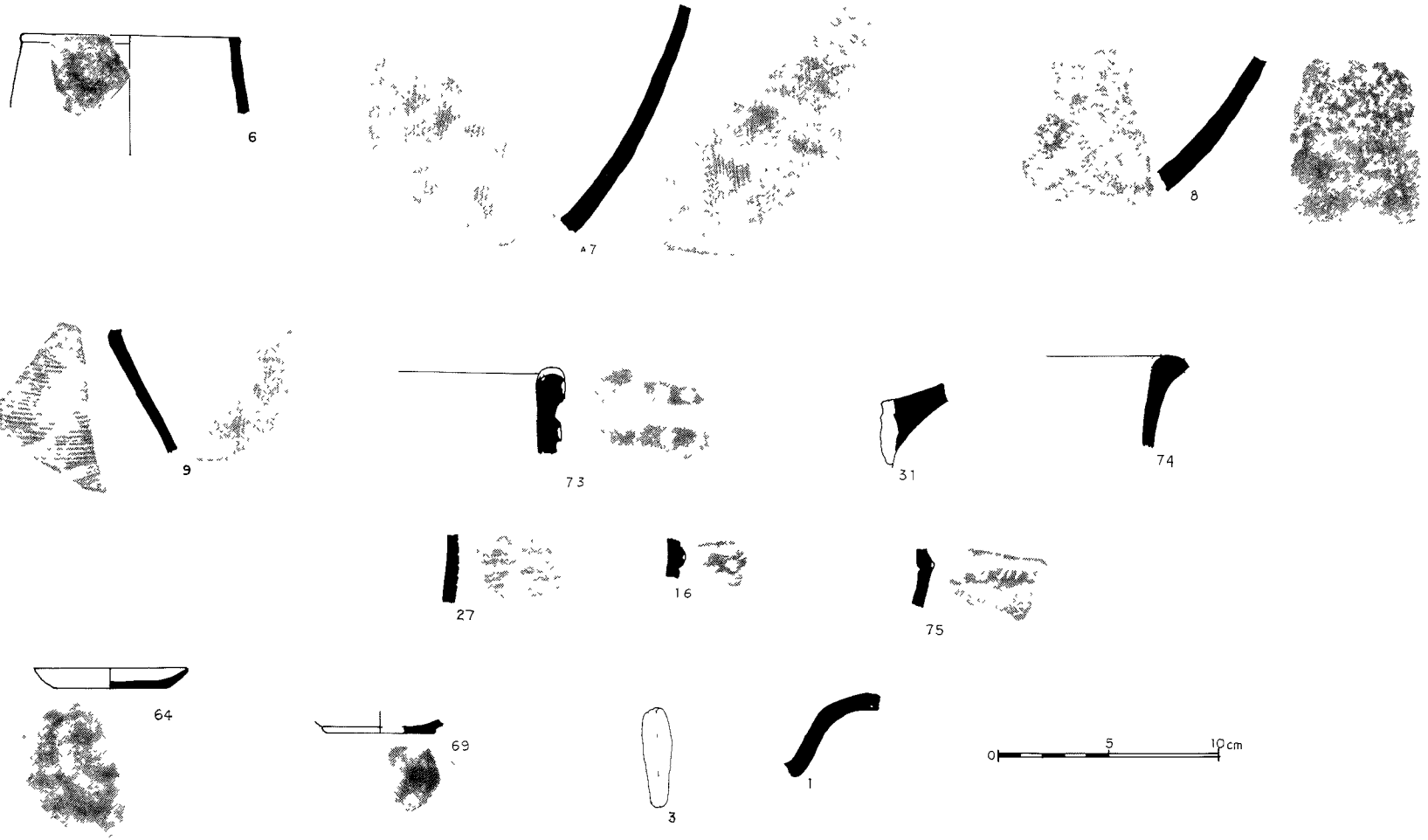
第10図　大手浜遺跡遺物実測図



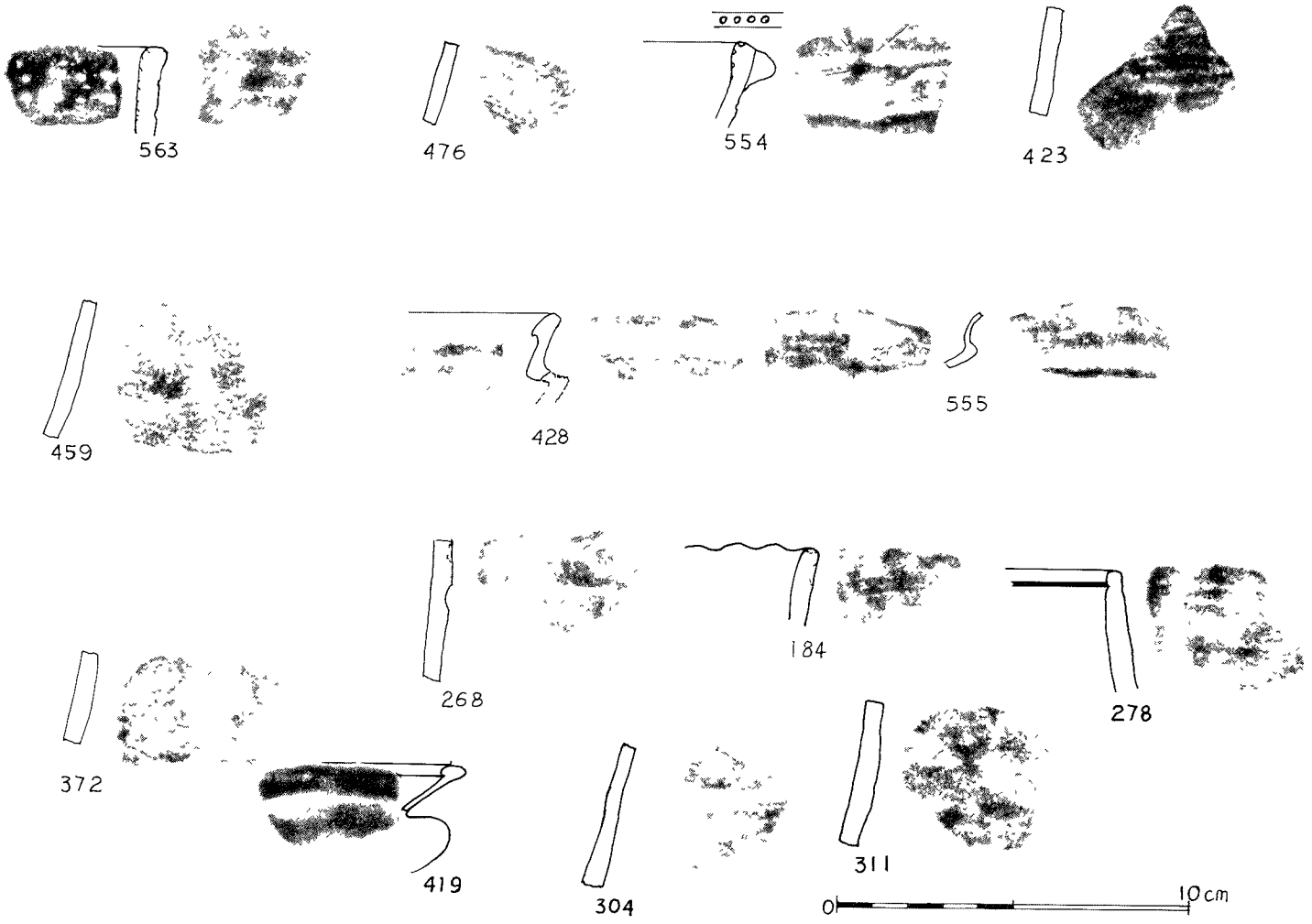
第11図　大手浜遺跡遺物実測図



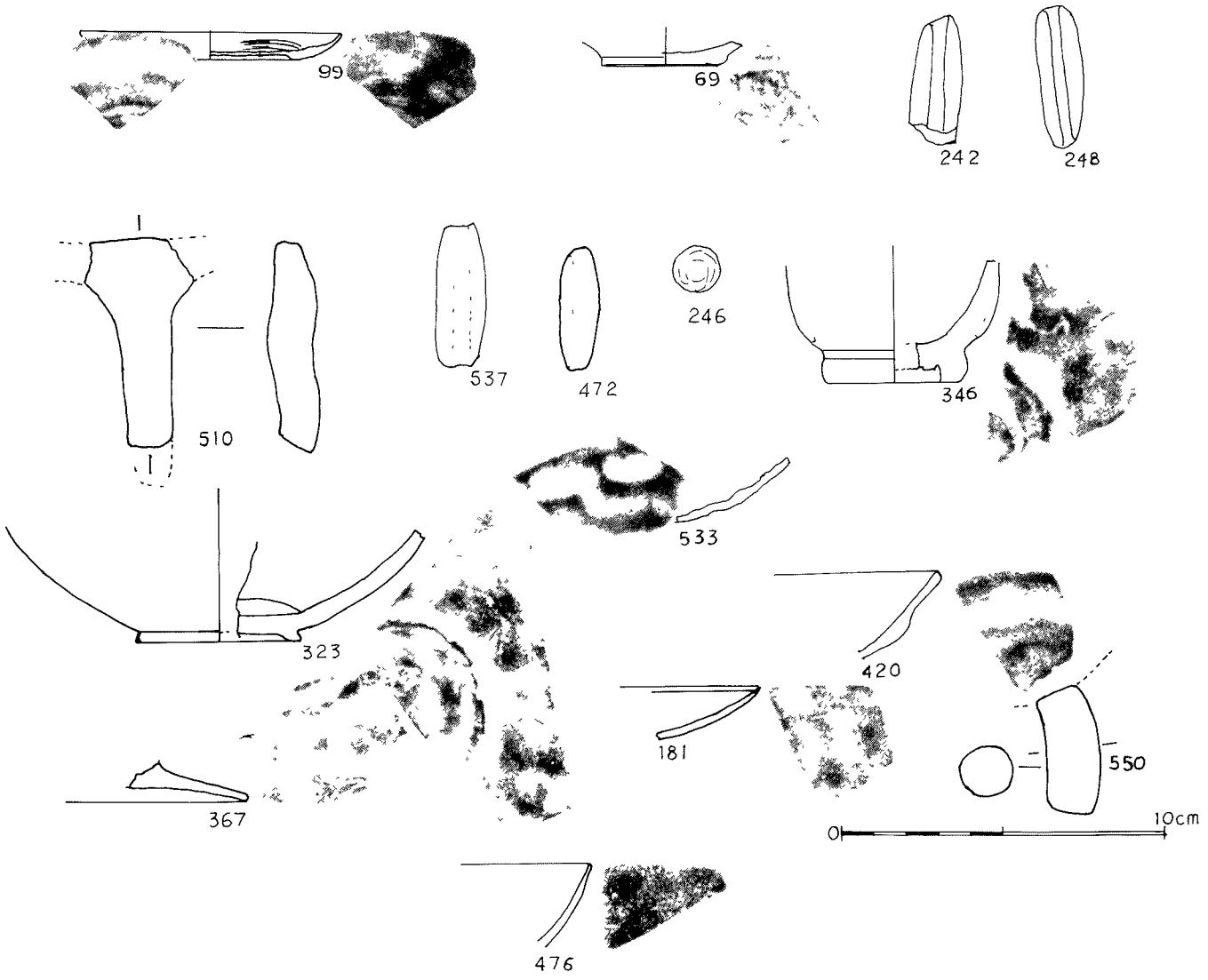
第12図　大手浜遺跡遺物実測図



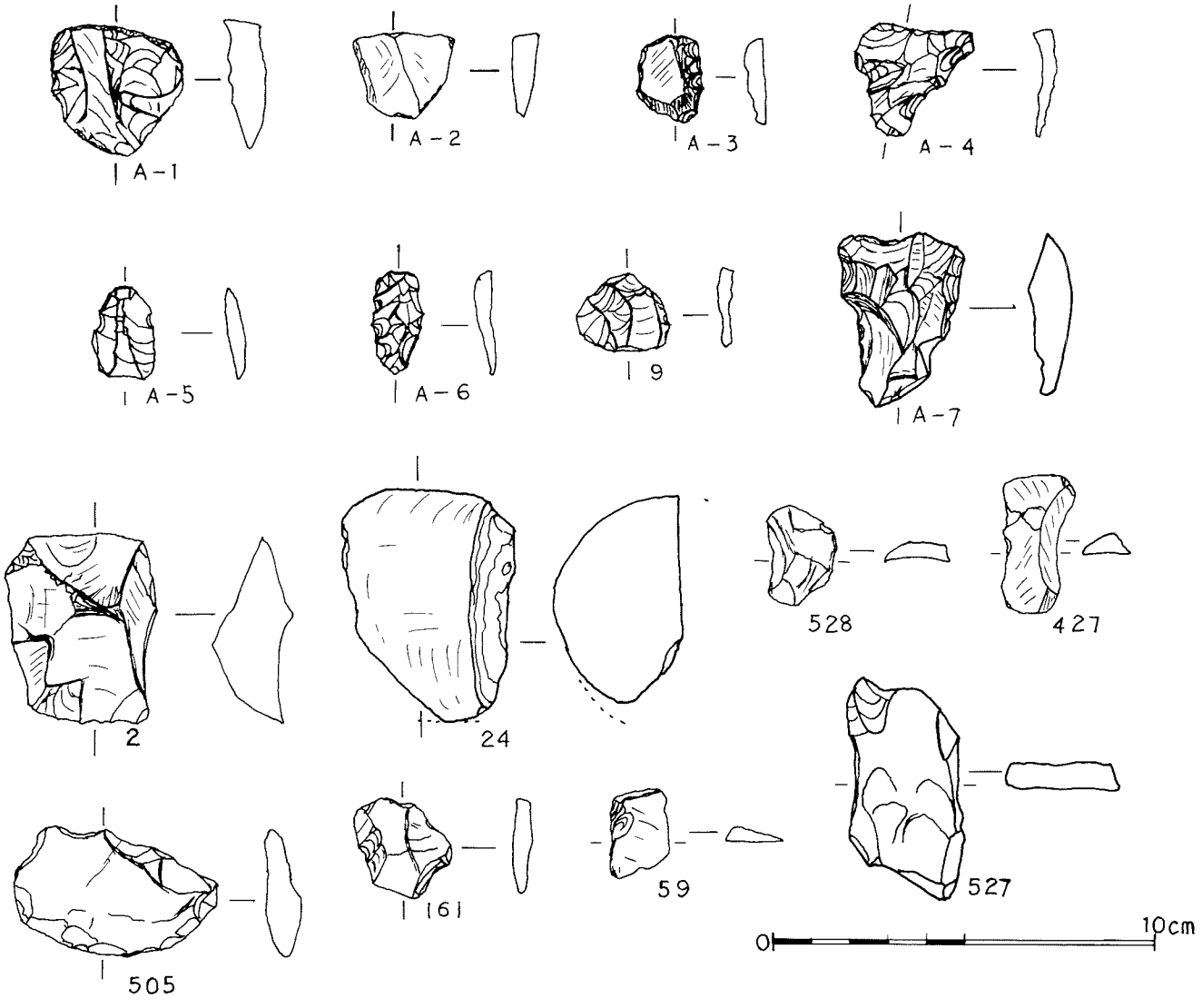
第13図　大手浜遺跡遺物実測図



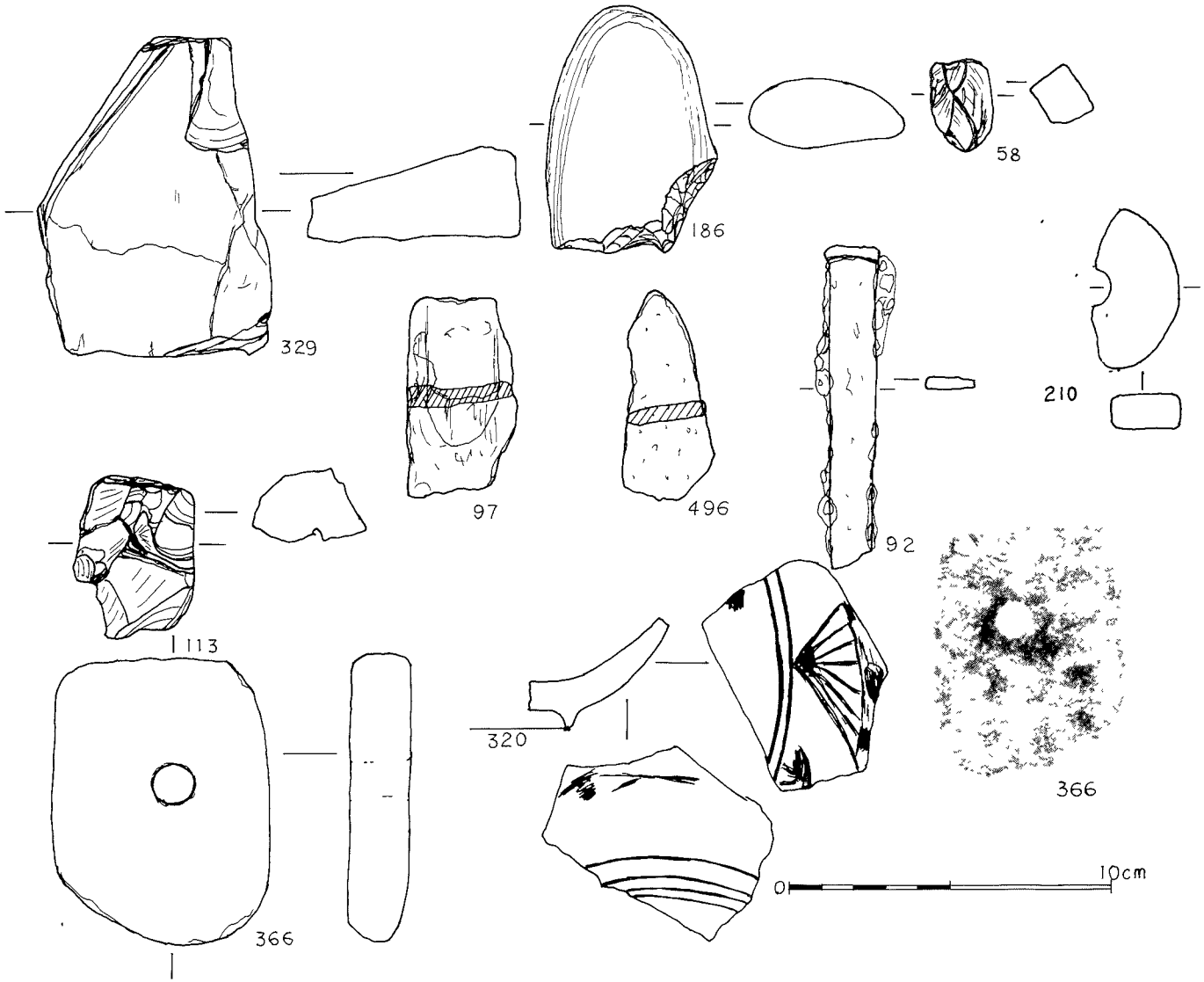
第14図　大手浜遺跡遺物実測図

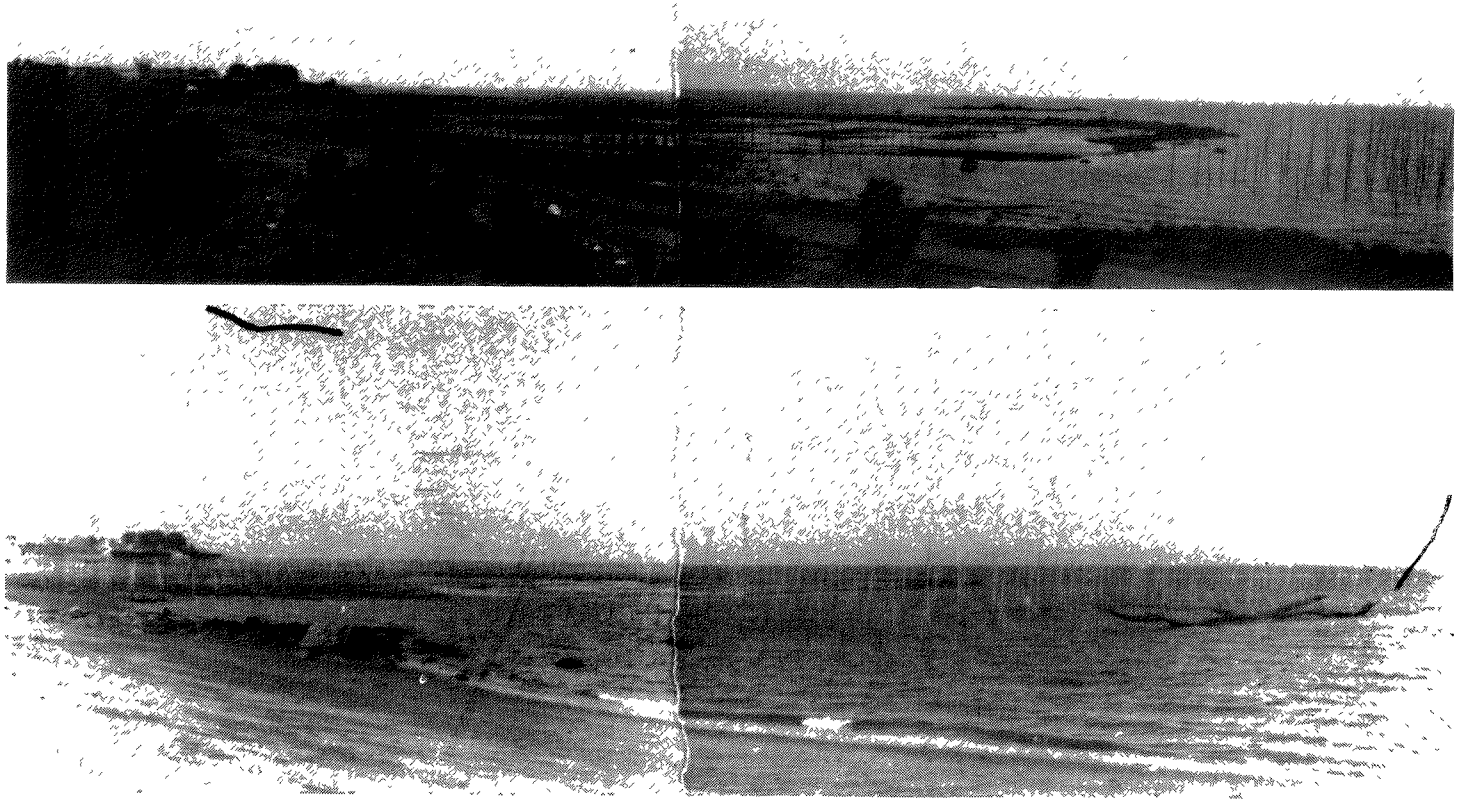


第15図　大手浜遺跡石器実測図



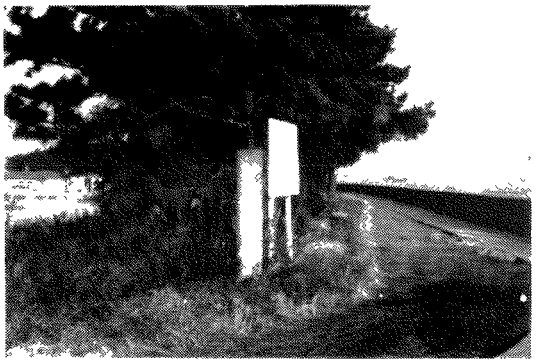
第16図　大手浜遺跡遺物実測図





第 17 図　　大手浜海岸の干潮時(上)と，満潮時近い頃の(下)同一干潟地

（註）上は干魚見「ちくい」であるか，現況は標高 0 米頃て，一帯は干潮時は干潟となる。



上　遺跡地の風致地区指定の立札

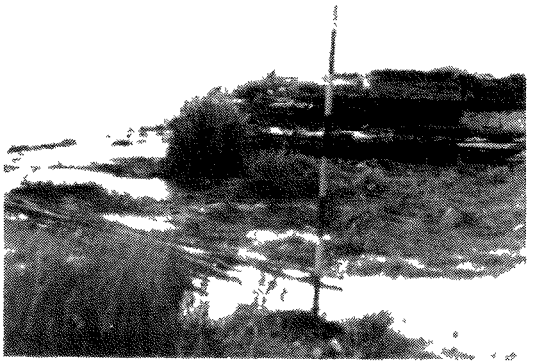
中　２ｔよりみた金戸山

下　第１図８　　ｆ魚見（ちくい）

第 18 図

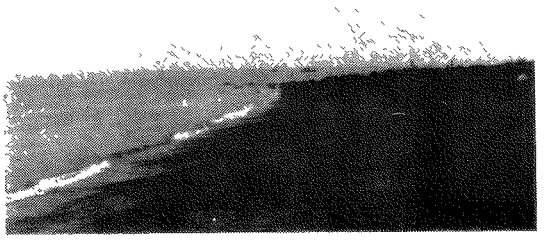
上　金戸島（片町新田より）

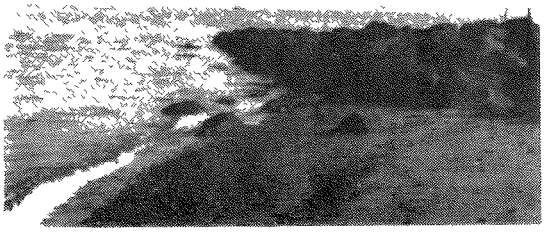
中　大潮時，トレンチに潮か入る（１ｔ－３）

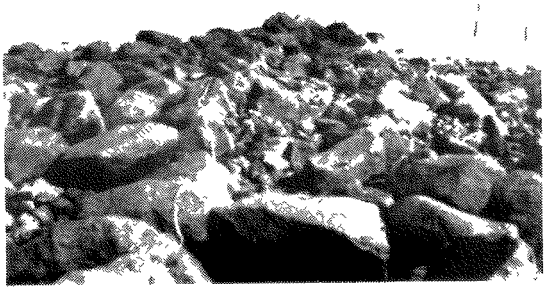


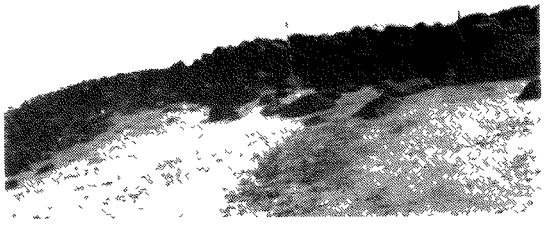
下　大潮時，潮を受ける大手浜遺跡

第 19 図







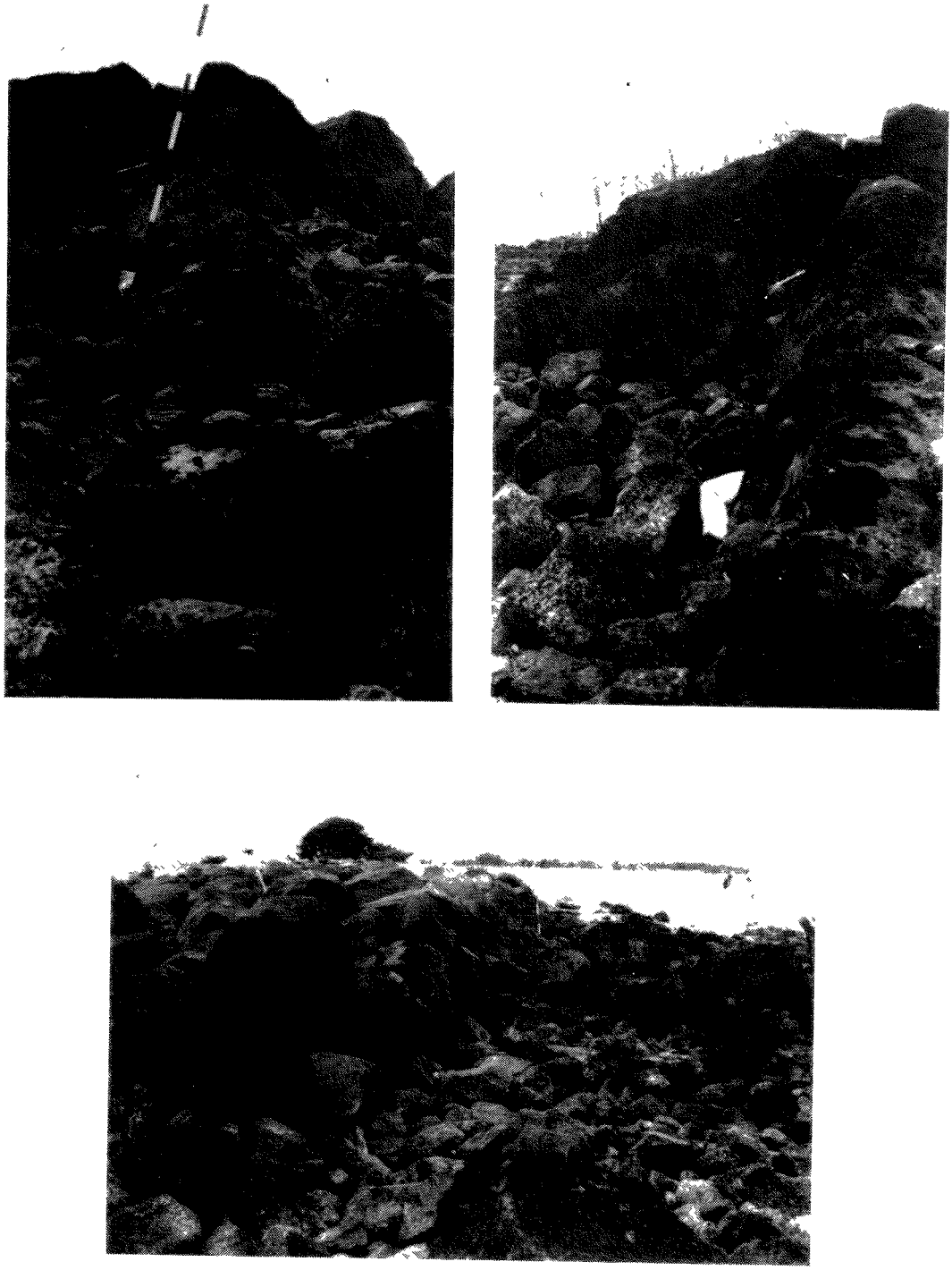


第 20 図

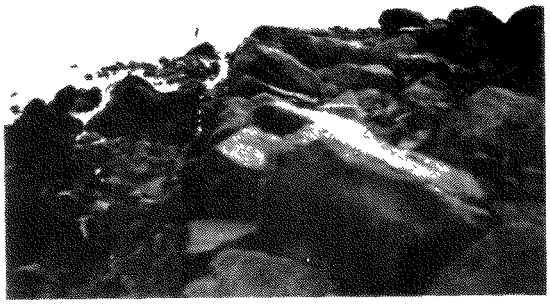
旧防波堤（西より東に向かって写す）

第 21 図

旧防波堤の状況（いすれも西から東に向かって写す）



第 22 図　旧防波堤の状況（上左は防波堤南側，上右は北側，「上図はいすれも西から東に向かって」）
下は北側「東より西に向かって」）



北側の捨石の状況

上　金戸山南側石垣の状況

同北側の基礎積の状況

中　金戸山西側石垣崩壊の状況

基礎上の積石が除去された状況

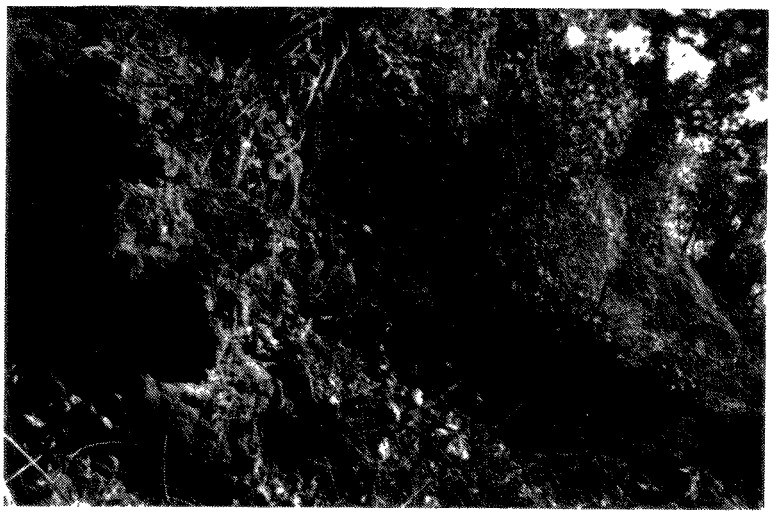
下　金戸山南西隅より対岸に橋があったといわれるその礎石とみられる状況

第 23 図　旧防波堤

第 24 図　金戸山景

上　金戸山東側の二重石垣

中　金戸山北側の登坂の状況

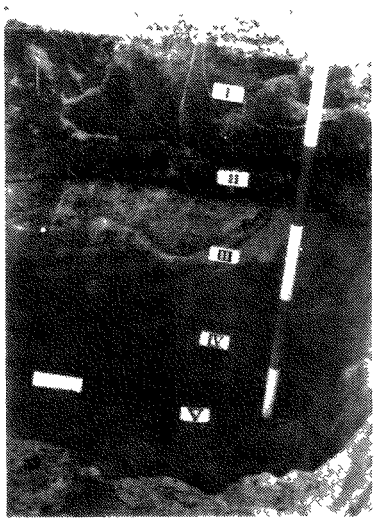


下　金戸山西南隅にみる積み上げの状況

第 25 図　　金戸山の石組

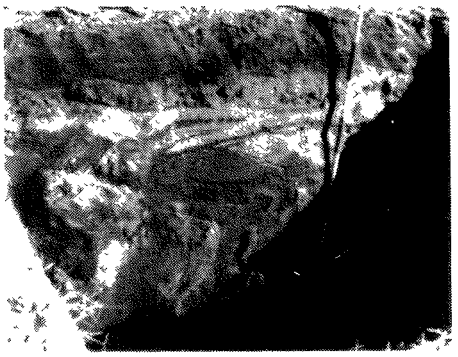
第 26 図　　トレンチ断面写真図

第26図－1

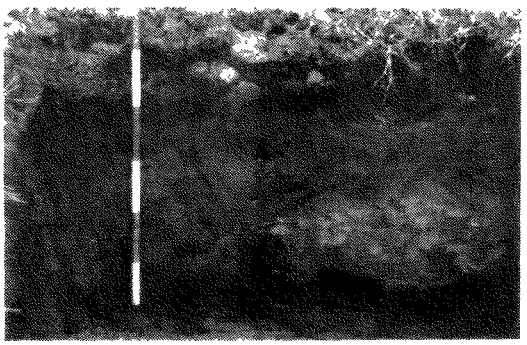


1 t－1 （c）

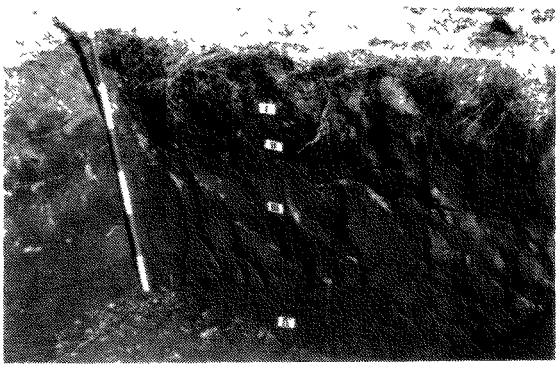
第26図－2



上　1 t－9



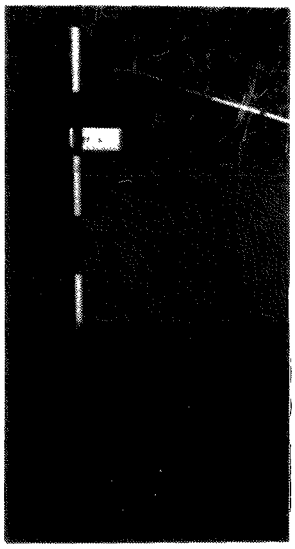
中　1 t－7 （土錘，磁器の出土状況）



1 t－5

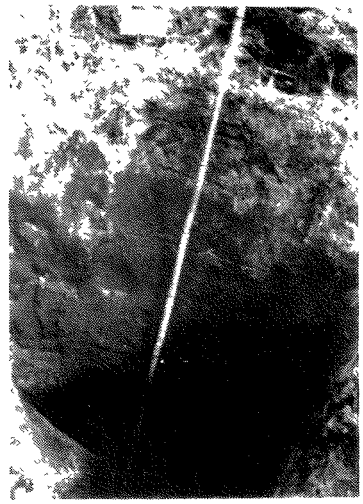
下　1 t－8

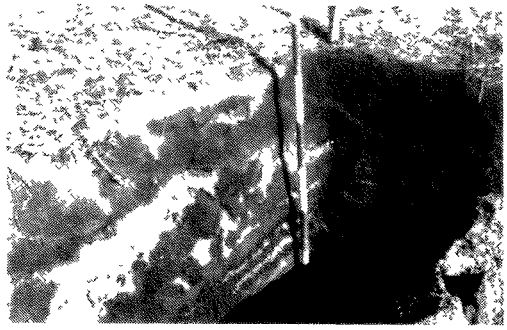
第26図－3

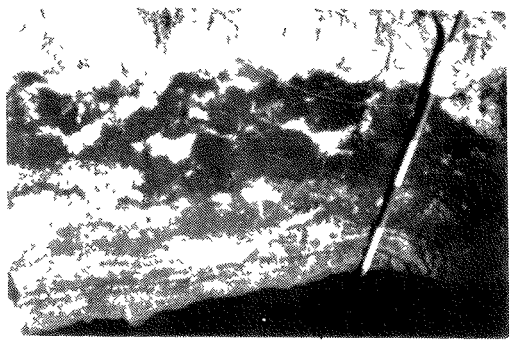


上左　2 t －10（5層Ⅰ部　瓦の出土）
Ⅰ右　2 t －8（4層　砲器，陶器　6層Ⅰ瓦，陶器出土状況）
下左　2 t －4（砲器出土状況）
下右　2 t －7（3層下骨片と陶器の出土状況）

第26図－4

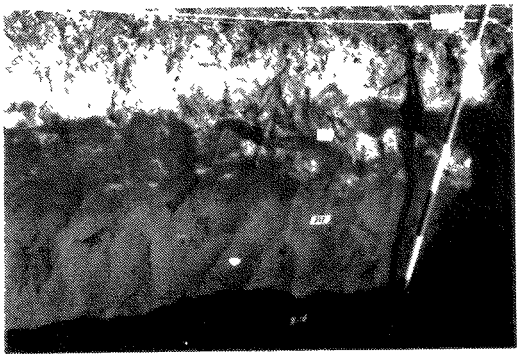


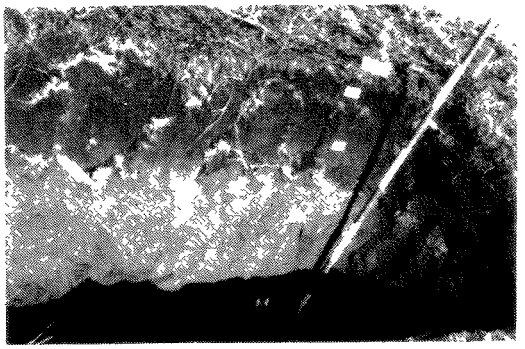


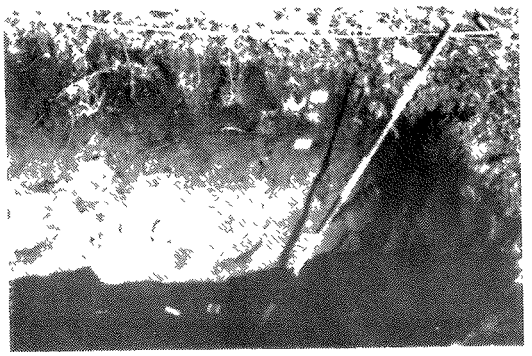


上　2 t －13
中　3 t －2
下　3 t －5

第26図－5

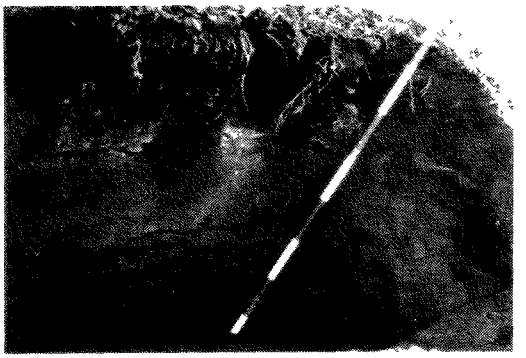


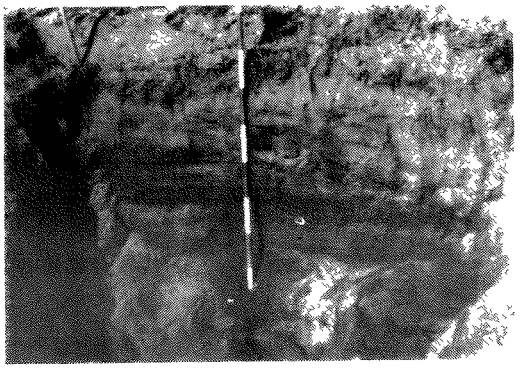




ㅣ　4 t－1
ㅛ　4 t－3
ㅏ　4 t－4

第26図－6





ㅗ　5 t－2
ㅠ　5 t－4
下　6 t

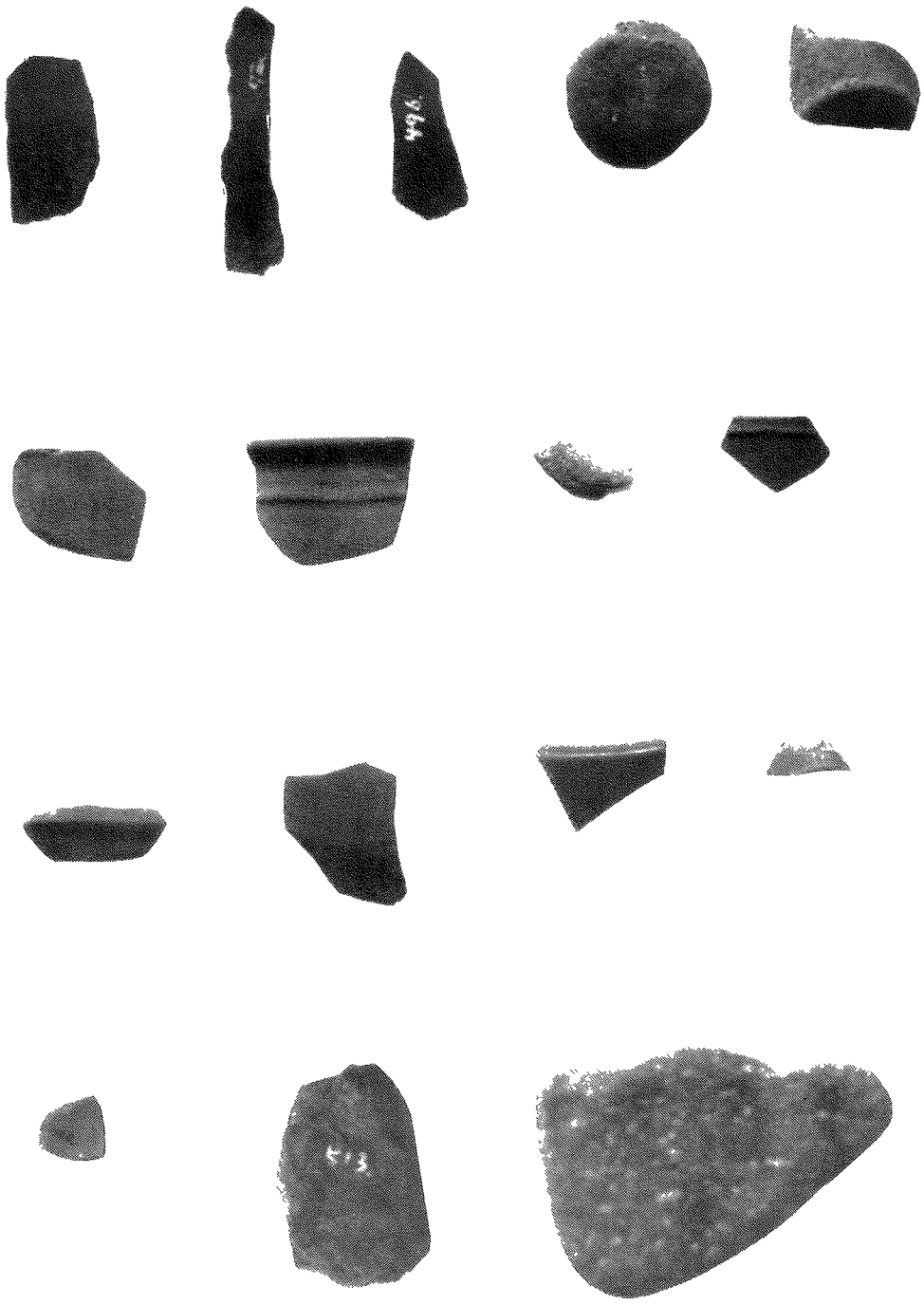
第27図－1

第 27 図　　遺物写真図

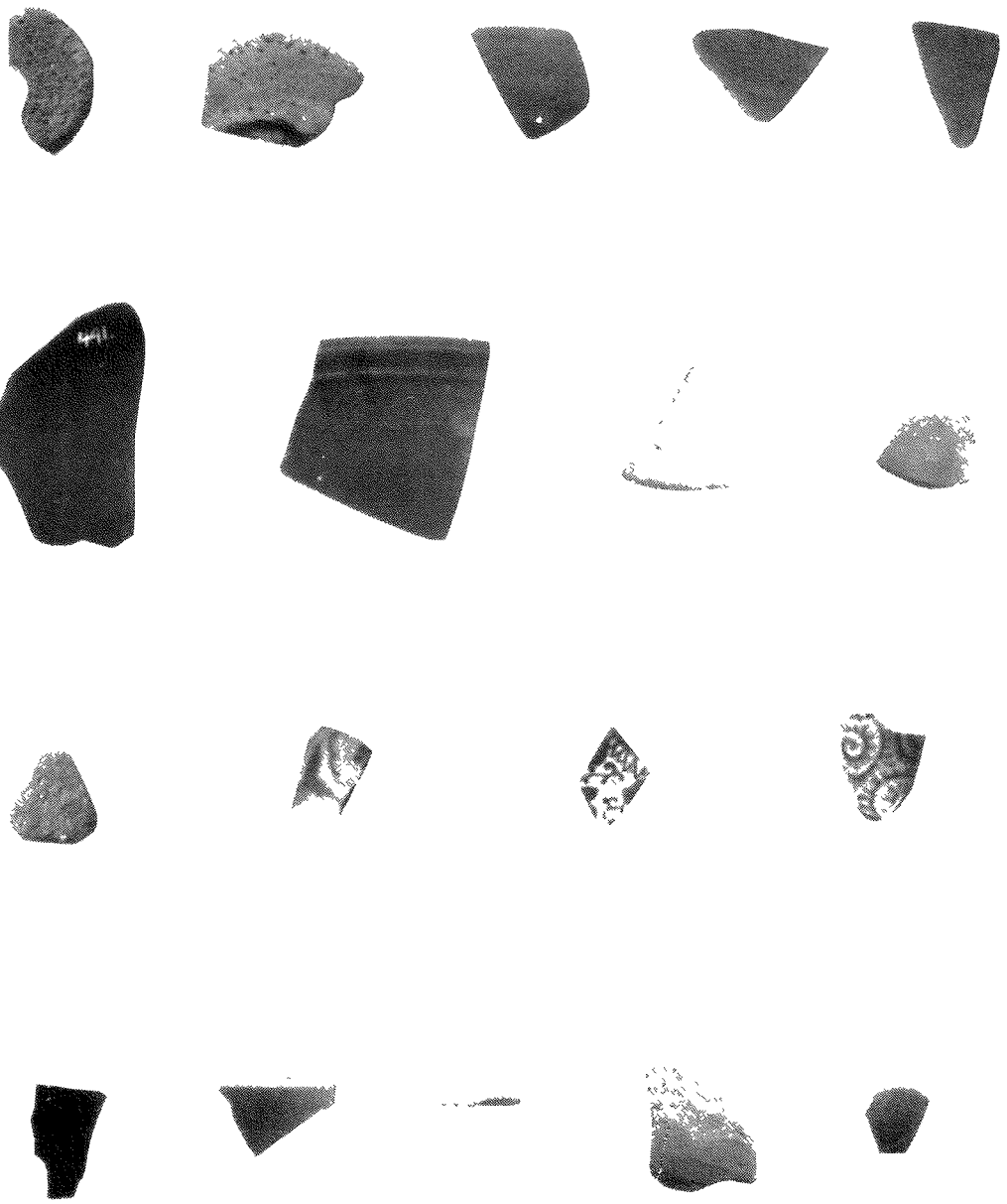
第27図－２

第27図－3

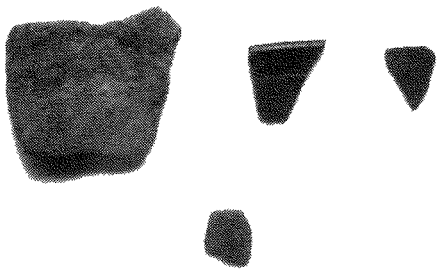
第27図－4



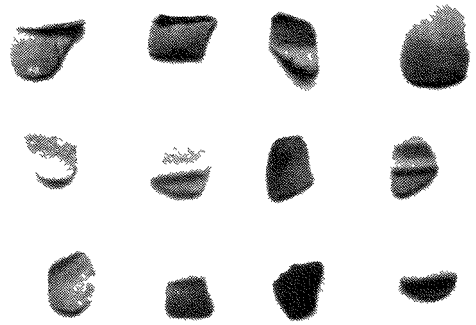
第27図－5

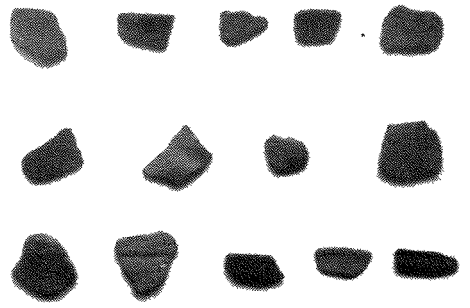


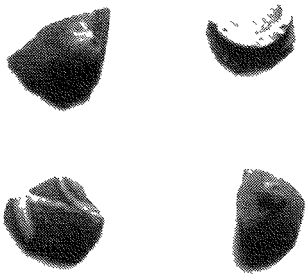
第27図－6



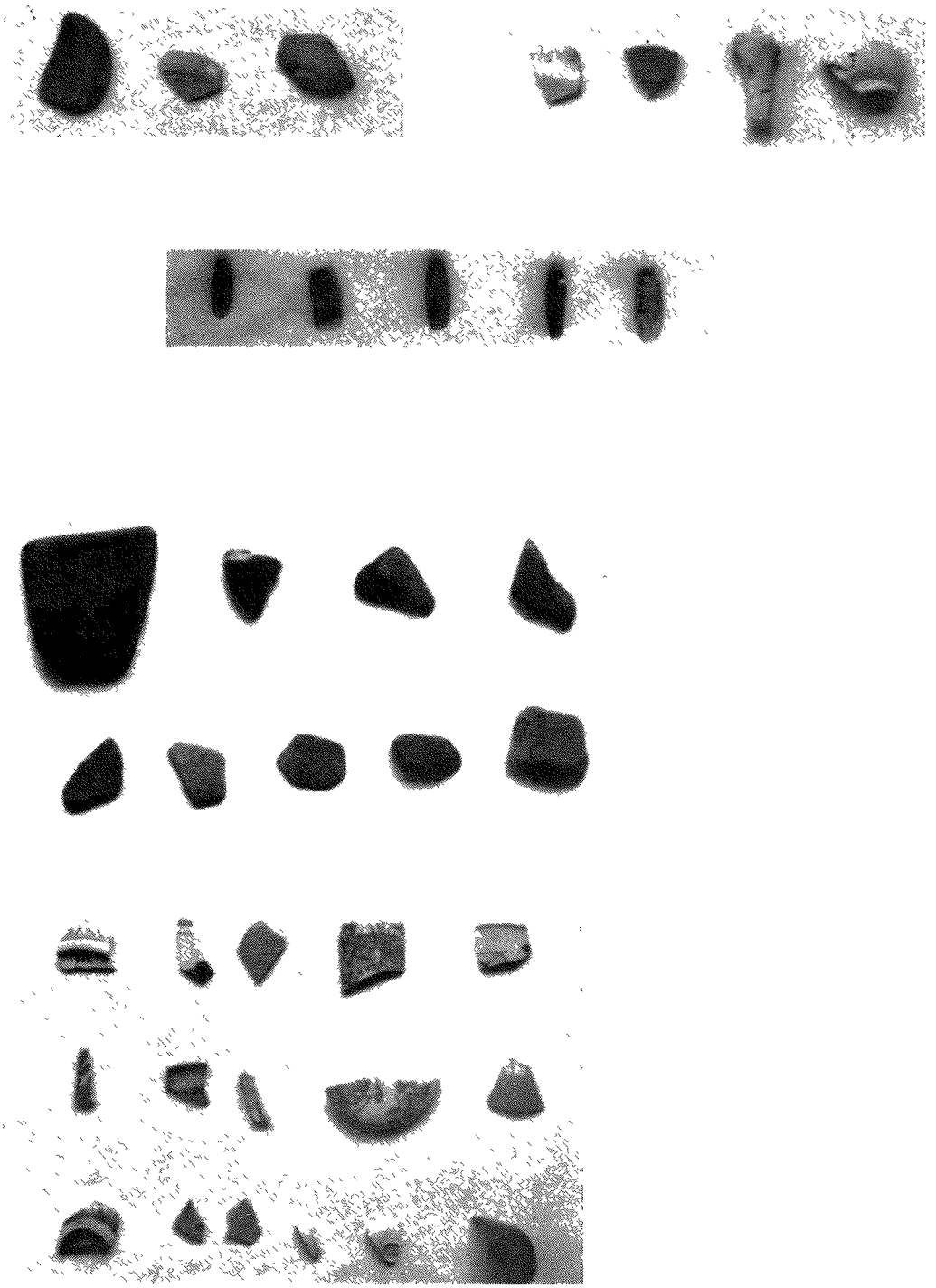
第27図－7



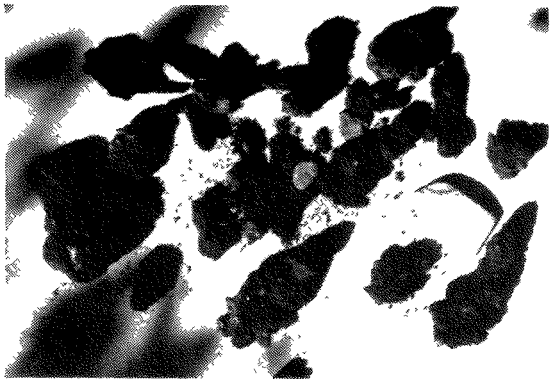




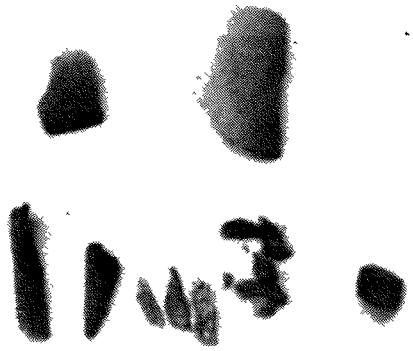
第27図－８



第27図－9



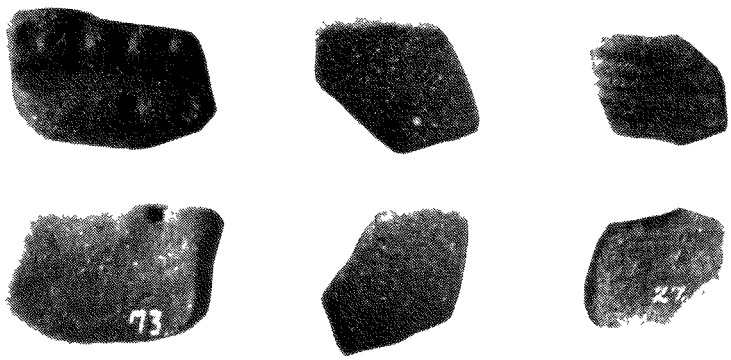
（上）



（中）

（下）

第 27 図－10　　縄文土器表裏ケ真図（左より73，278，27）

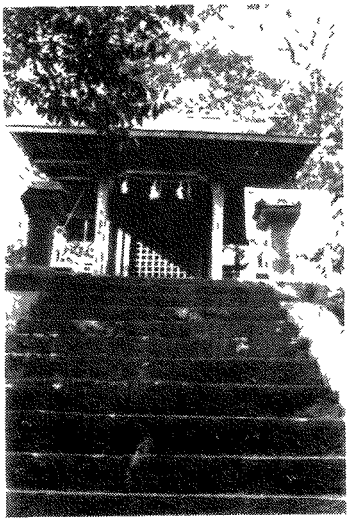


上　金戸山台上の地引石の状況

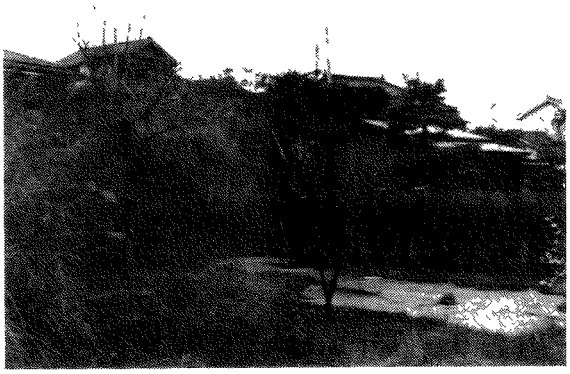
中　金戸山の登坂路

下　登坂路下の路跡

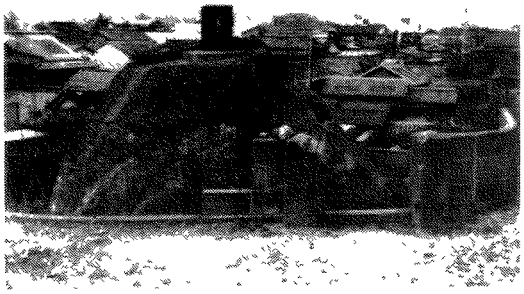
第 28 図　　金戸山関係写真図



(1)　偕竜園神社（霊立公園）



(4)　八 天 山



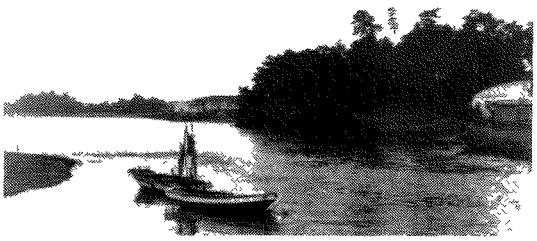
(5)　川竹山の八大竜王碑

(2)　鷹島の岬

(3)　浜ノ城遺構の一部

(6)　植木元太郎氏旧邸から
（松島の周辺）

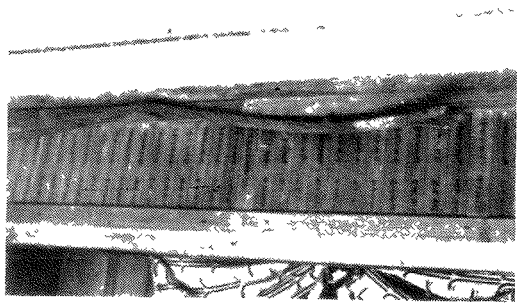
第 29 図



(7)　島原ノ浦

(10)　烏山一帯

(8)　竜神石碑（浜田医院内）



(11)－イ　蛇 信 仰（杉谷天満宮）

(9)　弁 天 山

(11)－ロ　蛇 信 仰（稲荷社）

島原市文化財調査報告書　第1集

大手浜遺跡調査報告

昭和56年 3 月31 日

発行所　島原市上の町537番地
島原市教育委員会

印刷所　凸版印刷株式会社

不　許　復　製